

# 甲虫ニュース

No. 144

December 2003

## COLEOPTERISTS' NEWS

日本産ツツキノコムシ科検索図説 III 注<sup>1</sup>

——ツツキノコムシ族② (ツツキノコムシ属 (続き), ムネブトツツキノコムシ属,  
ナガツツキノコムシ属)——

川那部 真

### 1-1-1. フタオビツツキノコムシ *Cis bifasciatus* REITTER, 1877

『原色昆虫大図鑑Ⅱ』<sup>1)</sup> p. 216, No. 23, 『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』<sup>2)</sup> p. 282, No. 15.

TL: 1.53~1.63 mm, EW: 0.75~0.85 mm. 上翅の基部と中央後方にあわせて2本の黒褐色黄帯をもつことで、他種との区別は容易。R. HILLERによる山口県萩地方での採集個体が基準標本になっている。本州中部以西を中心に分布するが少ない。分布: 本州, 四国, 九州。寄主菌: スルメタケ。

### 1-1-2. エゾツツキノコムシ *Cis jezoensis* NOBUCHI, 1960

『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』 p. 282, No. 13.

TL: 1.42~1.54 mm, EW: 0.69~0.73 mm. ♂の頭楯中央に強く突出したM型の突起をもつことで顕著な種。明らかに長さの異なる2種類の剛毛で上翅が被われる種は、ツツキノコムシ属では本種とフタオビツツキノコムシだけである。本州中部以北に分布するが少ない。分布: 北海道, 本州。寄主菌: カワラタケ。

### 1-1-3. トウホクツツキノコムシ *Cis fukudai* CHŪJŌ, 1940

『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』 p. 282, No. 14.

TL: 1.34~1.4 mm, EW: 0.65~0.68 mm. 上翅の剛毛は列状に配列し、♂の頭楯には一対の棘状小突起がある。本州中部以北に分布するが少ない。分布: 本州。寄主菌: アラゲカワラタケ。

### 1-1-4. マルムネトサカツツキノコムシ *Cis sasajii* KAWANABE, 2001

KAWANABE, 2001, Spec. Publ. Japan Coleopt. Soc., 1: 267.

TL: 1.48~1.92 mm, EW: 0.68~0.94 mm. トウホクツツキノコムシに似るものの一回り大きく、前胸背板の点刻が密であることにより区別できる。2種ともユーラシア大陸に分布する *C. comptus* グループに属する。北海道に分布するが少ない。分布: 北海道。寄主菌: ミダレアミタケ。

### 1-1-5. ササカワツツキノコムシ *Cis sasakawai* NOBUCHI, 1960

『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』 p. 281, No. 12.

TL: 1.02~1.36 mm, EW: 0.48~0.65 mm. 体表面は金色の鱗片状短毛で密に被われる。♂の頭楯には上反する台形の突起があり、前胸背板前縁には中央部がややえぐられ、頭部の突起とはほぼ同大のM型突起がある。少ない。分布: 北海道, 本州, 四国, 九州, 対馬。寄主菌: カワラタケ, ヒイロタケ。

### 1-1-6. オオツツキノコムシ *Cis boleti* (SCOPOLI, 1763)

『原色昆虫大図鑑Ⅱ』 p. 216, No. 20, 『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』 p. 281, No. 10.

<sup>1)</sup> Makoto KAWANABE: An illustrated guide to identification of ciid beetles of Japan, III.

<sup>2)</sup> 各種には使用者の便を考慮して、一般に広く利用されている北隆館『原色昆虫大図鑑Ⅱ』と保育社『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』の掲載ページと解説番号を付けた。

TL: 2.35~3.6 mm, EW: 1.33~1.7 mm. 体表面は金色の鱗片状短毛で密に被われる。♂の頭楯は両側でゆるく張り出すが、顕著な突起は形成しない。♂の前胸背板前縁はゆるく張り出し、中央で弱くえぐられる。♂♀とも前胸背板側縁は広く張り出したうばを形成する。日本産は亜種 *C. b. polypori* CHŪJŌ とされるが、私はまだ検討していない。各地にきわめて普通。分布: 北海道, 本州, 四国, 九州; ヨーロッパ, 中央アジア, 中国。寄主菌: カワラタケ, オオチリメンタケ, チャカイガラタケ。

1-1-7. ハバビロツツキノコムシ *Cis brevipennis* NAKANE et NOBUCHI, 1955

『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』p. 281, No. 10.

TL: 1.45~2.39 mm, EW: 0.69~1.24 mm. ♂の頭楯は両側で丸く張り出すが三角状突起にはならない。上翅が金色の短毛で被われる点では次の 2 種に似るが、前胸に比べて上翅が相対的に短いために太短く見える。本州中部以北の標高が高い地域に分布するが少ない。分布: 本州。寄主菌: カワラタケ。

1-1-8. コモンツツキノコムシ *Cis maculatus* CHŪJŌ, 1939

『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』p. 281, No. 11.

TL: 2.14~2.92 mm, EW: 0.99~1.29 mm. 上翅に暗褐色の不明瞭で不規則な波状斑があることで区別は容易。♂の頭楯には一對の三角状突起がある。本州中部以北に分布するが少ない。本州では標高の高い地域に分布し、北海道では平地でも見られる。分布: 北海道, 本州; サハリン, 中国東北部。寄主菌: カワラタケ。

1-1-9. ミヤマツツキノコムシ *Cis nipponicus* CHŪJŌ, 1940

『原色昆虫大図鑑Ⅱ』p. 216, No. 19, 『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』p. 281, No. 10.

TL: 1.77~2.86 mm, EW: 0.85~1.33 mm. 体型, 背面の被毛, ♂頭楯の突起など多くの点で前種に酷似するが、上翅は黄褐色から暗褐色で単色。本州中部以北では前種と同一の子実体に混生することもある。全国にきわめて普通。分布: 北海道, 本州, 四国, 九州, 対馬, 南西諸島。寄主菌: カワラタケ, アラゲカワラタケ, ヤキフタケ, オオチリメンタケ, ホウロクタケ, チャミダレアミタケ, カイガラタケ。

1-1-10. ミカゲツツキノコムシ *Cis mikagensis* NOBUCHI et WADA, 1955

『原色昆虫大図鑑Ⅱ』p. 216, No. 21, 『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』p. 281, No. 13.

TL: 1.43~2.09 mm, EW: 0.74~1.06 mm. 上翅の点刻はほぼ同型同大, 剛毛は列状にならない。♂の頭楯は 4 歯状で, 前胸背板前縁は 2 歯状の突起を具える。前胸背板の正中線沿いに剛毛の分け目ができる。スギ材に生えるキカイガラタケ類を寄主とするため, 樹木がない場所でもスギ製の杭やベンチについて子実体から見いだされる。またマンネンタケ(霊芝)栽培地での発生も認められる。分布: 本州, 四国, 九州。寄主菌: ヒロハノキカイガラタケ, マゴジャクシ, マンネンタケ, ブクリョウ。

1-1-11. キムネツツキノコムシ *Cis subrobustus* MIYATAKE, 1954

『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』p. 282, No. 17.

TL: 1.36~2.11 mm, EW: 0.75~1.09 mm. 体型は幅広く, 前胸が大きいために上翅が短く見える (EL/PL ≤ 1.9)。前胸は上翅に比べてやや黄色みが強い。♂の頭楯は突出して一對の三角状突起を形成する。あまり多くない。分布: 本州, 四国, 九州。寄主菌: カワラタケ, アラゲカワラタケ, ヒイロタケ, ツヤウチワタケ。

1-1-12. ゴマフツツキノコムシ *Cis hieroglyphicus* REITER, 1877

『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』p. 282, No. 16.

TL: 1.73~2.12 mm, EW: 0.9~1.1 mm. 上翅の地色は黄褐色で, 不明瞭かつ不規則な暗褐色の斑紋がある。♂の頭楯は突出して一對の三角状突起を形成する。♂の腹部腹板第 1 節~3 節(ときに 2 節まで)の中央にそれぞれ腹孔がある。各地に普通。分布: 本州, 四国, 九州。寄主菌: カワラタケ, ヤキフタケ。

1-1-13. ミツアナツツキノコムシ *Cis seriatulus* KIESENWETTER, 1879

『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』p. 282, No. 16.

TL: 1.52~1.91 mm, EW: 0.78~0.99 mm. 前種に酷似するが, 上翅は暗褐色の単色で斑紋がない。あまり多くない。分布: 本州, 四国, 九州, 伊豆諸島, 対馬, 南西諸島。寄主菌: カワラタケ, アラゲカワラタケ, ヤキフタケ, クジラタケ, チリメンタケ, ヒイロタケ, カイガラタケ, ハチノスタケ。

1-1-14. タテスジツツキノコムシ *Cis japonicus* NOBUCHI, 1955

『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』p. 282, No. 18.

TL: 約 3.5 mm. 上翅の点刻が非常に小さく, 前胸背板の点刻よりも明らかに小さい。典型的な標本では, 次

の2種に比べて明らかに大型。本種からタイワンツツキノコムシまでは酷似しており、また個体変異の幅が明らかではないために、同定がきわめて難しい。分布：本州、四国、九州。寄主菌：カワラタケ。

**1-1-15. キタツツキノコムシ *Cis seriatopilus* MOTSCHULSKY, 1860**

『原色昆虫大図鑑Ⅱ』p. 216, No. 22, 『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』p. 282, No. 18.

TL: 約 2.2~2.8 mm. 各地にきわめて普通。分布：北海道、本州、四国、九州、伊豆諸島、対馬。寄主菌：カワラタケ、アラゲカワラタケ。

**1-1-16. タイワンツツキノコムシ *Cis taiwanus* CHŪJŌ, 1939**

TL: 約 1.8~2.8 mm. 前種に酷似する。典型的な標本では、前種に比べて背面の点刻が大きく前脚脛節外角の突起も顕著で、頑強に見える。また茶褐色味が強い。南西諸島以南では普通。分布：本州中部以西？、四国？、九州？、伊豆諸島、対馬、南西諸島；台湾。寄主菌：カワラタケ、アラゲカワラタケ。

**1-1-17. コウノツツキノコムシ *Cis konoï* CHŪJŌ, 1940**

『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』p. 282, No. 19 (図版の標本はクリイロツツキノコムシ), KAWANABE, 1997, Elytra, 25: 312 [再記載, ♂交尾器他]。

TL: 1.63~2.07 mm, EW: 0.76~0.94 mm. 上翅の被毛は相対的に長く、小楯板の縦の長さの0.2倍以上ある。♂の頭楯は両側で伸張し、一対の三角状突起を形成する。本種からクリイロツツキノコムシまでは外見上酷似しており同定は難しいが、上翅の被毛が10倍程度の低倍率でも見えるのは本種だけである。分布：北海道、本州；サハリン。寄主菌：ツリガネタケ、ツガサルノコシカケ。

本種以降クワガタツツキノコムシまでは、上翅の光沢が強く被毛が不明瞭、前胸腹板中央部は中心線に沿って隆起線を形成することから、前種までとは異なったグループを形成する。

**1-1-18. ニッコウツツキノコムシ *Cis nikkoensis* NOBUCHI, 1960**

KAWANABE, 1997, Elytra, 25: 314 [再記載, ♂交尾器他]。

TL: 1.56~2.0 mm, EW: 0.74~0.94 mm. 上翅の大きい方の点刻は複眼の個眼よりも大きい。♂の前胸背板前縁は、弱い中央で明瞭にえぐられるため、一対の微小なこぶ状隆起のように見える。分布：北海道、本州、四国、九州。寄主菌：ツリガネタケ、バライロサルノコシカケ、ツガサルノコシカケ。

**1-1-19. クリイロツツキノコムシ *Cis rufocastaneus* NAKANE et NOBUCHI, 1955**

KAWANABE, 1997, Elytra, 25: 316 [再記載, lectotypeの指定, ♂交尾器他]。

TL: 1.45~1.96 mm, EW: 0.67~0.97 mm. 上翅の大きい方の点刻は複眼の個眼よりも小さい。♂の前胸背板前縁は弧状で、中央は裁断状のため、一対のこぶ状隆起にはならない。分布：本州、四国。寄主菌：ツリガネタケ、バライロサルノコシカケ。

**1-1-20. ツヤムネツツキノコムシ *Cis laevigatus* KAWANABE, 1997**

KAWANABE, 1997, Elytra, 25: 319.

TL: 1.47~1.84 mm, EW: 0.69~0.83 mm. 前胸背板表面の点刻と点刻の間は平滑で、網目状ないし皺状印刻を欠くことによりコウノ、ニッコウ、クリイロとは区別できる。分布：本州、四国、九州、南西諸島。寄主菌：ツリガネタケ、*Trametes* sp.

**1-1-21. アラハダツツキノコムシ *Cis yamamotoi* KAWANABE, 1997**

KAWANABE, 1997, Elytra, 25: 321.

TL: 1.31~1.61 mm, EW: 0.58~0.74 mm. 上翅の点刻は、部分的に縦方向につながった不明瞭な列を形成する。♂の頭楯は両側でわずかに伸張し、一対の半円形の葉状片になる。分布：北海道、本州、四国。寄主菌：コフキササルノコシカケ、ツリガネタケ。

**1-1-22. キョウトツツキノコムシ *Cis eminenticollis* NOBUCHI, 1955**

KAWANABE, 1997, Elytra, 25: 324 [再記載, ♂交尾器他]。

TL: 1.43~1.5 mm, EW: 0.65~0.71 mm. ♂の頭部に一対の三角状突起、前胸背板前縁に一対の小突起をもつことで顕著な種。前脚脛節外縁に鋸歯を欠くこと、♂の前胸背板前縁の突起などによりコウノ、ニッコウ、クリイロ、ツヤムネ、アラハダとは区別できる。きわめてまれ。分布：本州。寄主菌：不明。

1-1-23. オチバツツキノコムシ *Cis morikawai* MIYATAKE, 1954

『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』 p. 282, No. 20, KAWANABE, 1997, Elytra, 25: 325. [♂交尾器他].

TL: 1.19~1.4 mm, EW: 0.58~0.66 mm. ♂の頭楯は両側でわずかに伸張し、一対の半円形の葉状片を形成する。サルノコシカケ類の子実体から採集されたことがなく、落ち葉や朽ち木をツルグレン装置にかけることにより得られている。まれ。分布: 本州, 四国, 九州。寄主菌: 不明 (落ち葉や朽ち木の中)。

1-1-24. クワガタツツキノコムシ *Cis capricornis* KAWANABE, 1997

KAWANABE, 1997, Elytra, 25: 326.

TL: 1.0~1.34 mm, EW: 0.48~0.56 mm. ♂の頭部に、クワガタムシの大あごのようなツノを具えることにより顕著な種。分布: 南西諸島。寄主菌: ツヤウチワタケ, *Oxyporus* sp.

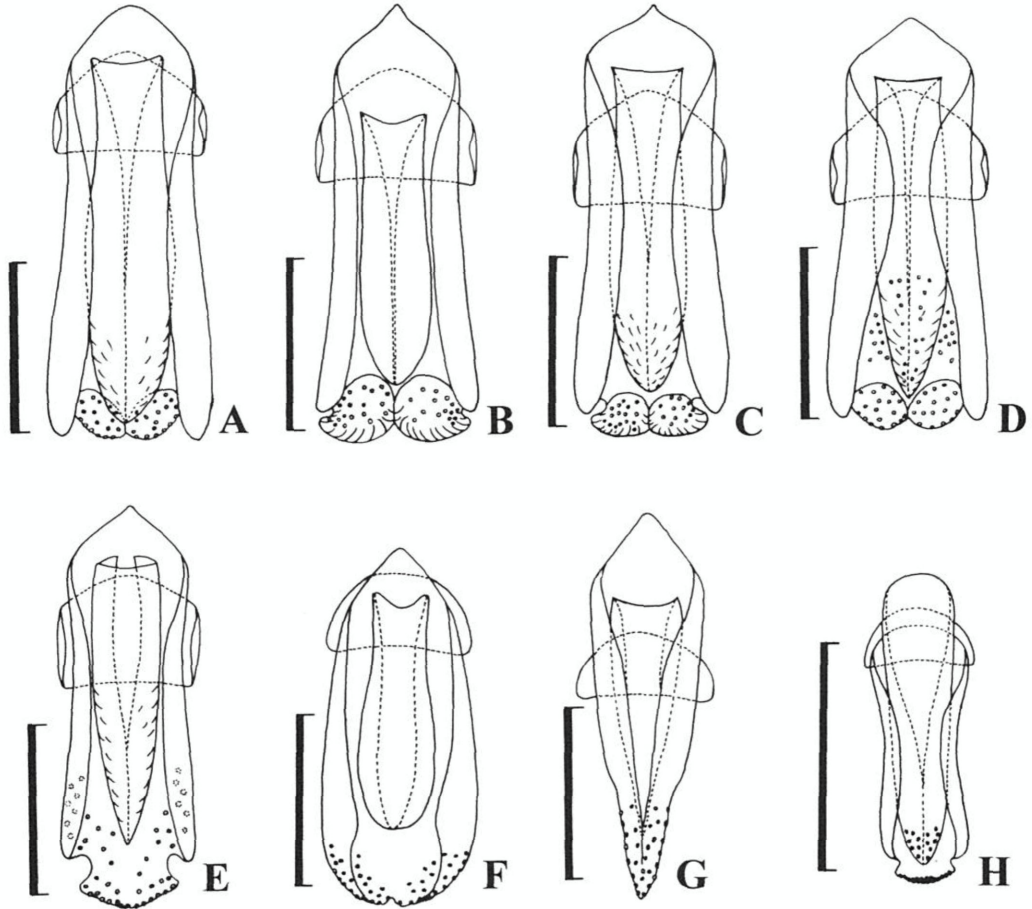


図1. ツツキノコムシ属8種 (背面に顕著な剛毛を欠く種) の♂交尾器——A, コウノツツキノコムシ *C. konoii*; B, ニッコウツツキノコムシ *C. nikkoensis*; C, クリイロツツキノコムシ *C. rufocastaneus*; D, ツヤムネツツキノコムシ *C. laevigatus*; E, アラハダツツキノコムシ *C. yamamotoi*; F, キョウトツツキノコムシ *C. eminenticollis*; G, オチバツツキノコムシ *C. morikawai*; H, クワガタツツキノコムシ *C. capricornis*. スケールは0.01 mm.

1-2. ムネブトツツキノコムシ属 *Lipopterocis* MIYATAKE, 1954

ツツキノコムシ属に酷似しており、後翅を欠くこと以外は本質的な差が認められない。独立した属として扱うかどうかについては今後の検討を要する。ここでは、従来通りの扱いとしておく。

1-2-1. ムネブトツツキノコムシ *Lipopterocis simplex* MIYATAKE, 1954

『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』 p. 281, No. 5.

TL: 1.39~1.75 mm, EW: 0.8~0.94 mm. 体型は幅広く、前胸が大きいために太短く見える (EL/PL $\leq$ 1.63). 前胸背板表面の点刻は1種類で細かく密に分布し、点刻間の距離は点刻直径の0.2~3倍。上翅の点刻は大小2種類からなり、大きい方は部分的に点刻列を形成する。♂の頭楯はわずかに上反し波状になる。体型はキムネツツキノコムシに似るが、後翅を欠くことに加えて、後胸腹板が短く腹部腹板第1節とほぼ同長であることにより区別できる (キムネは後胸腹板の方が明らかに長い)。本州中部以西に分布するが多くない。分布: 本州、四国。寄主菌: カワラタケ, アラゲカワラタケ, ヤキフタケ, ヒイロタケ。

### 1-3. ナガツツキノコムシ属 *Nipponocis* NOBUCHI et WADA, 1955

上翅被毛は2種類。♂の腹部腹板第1節に腹孔を欠く。体が相対的に長い毛で被われ、♂が腹孔を欠くこと以外は、ツツキノコムシ属と本質的な差がない。少なくとも未記載種が1種ある。

#### 種への検索

1. 体は小さく TL は 2.07 mm 以下, EW は 0.83 mm 以下. 体背面は暗褐色の太くて直立した棘状毛と黄褐色の細く短い毛で被われる. ♂の頭楯は小突起を欠く. ....トカラナガツツキノコムシ
- 体は大きく TL は 2.72 mm 以上, EW は 1.06 mm 以上. 体背面は黄色から銀白光沢の細毛で被われ, 被毛は直立するものと横臥するもの2種類からなる. ♂の頭楯は両側に小突起を具える. ....2
2. 上翅は, 密集して部分的に毛斑を形成する太く短い銀白色の被毛と, 低倍率 (10 倍) では十分に見えない赤褐色の細毛に被われる. ....ケマダラナガツツキノコムシ
- 上翅の被毛は密集した毛斑を形成しない. 低倍率 (10 倍) でも直立した長毛と横臥した短毛の2種類が見える. ....3
3. 体は細長く, EL/EW は 1.69 以上, EL/PL は 2.23 以上. ♂の前胸背板前縁は弧状. 上翅の長い方の被毛は小楯板の縦の長さよりも著しく長い. 短い方の被毛は部分的に放射状に生える. 上翅点刻は大きさが不均一. ....ケナガナガツツキノコムシ
- 体は太く頑強で, EL/EW は 1.57 以下, EL/PL は 1.89 以下. ♂の前胸背板前縁は中央でえぐれる. 上翅の長い方の被毛は小楯板の縦の長さよりも短い. 短い方の被毛は不規則に生える. 上翅点刻は均一で1種類. ....アシュウナガツツキノコムシ

#### 1-3-1. トカラナガツツキノコムシ *Nipponocis unipunctatus* NAKANE et NOBUCHI, 1956

『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』p. 281, No. 6.

TL: 1.5~2.07 mm, EW: 0.67~0.83 mm. 体は強く凸隆した細長い円筒形。上翅の点刻はほぼ同大で、黄褐色の細く短い毛と暗色のほぼ直立した棘状毛で密に被われる。前胸と上翅の剛毛はほぼ同質。頭楯には突起や葉状片がなく、外見で♂♀の区別はできない。アカマツなどに寄生するシハイタケ類に生息するが少ない。分布: 北海道, 本州, 四国, 九州, 対馬, 南西諸島。寄主菌: シハイタケ, ウスバシハイタケ, ワサビタケ。

#### 1-3-2. ケマダラナガツツキノコムシ *Nipponocis magnus* NOBUCHI, 1955

『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』p. 281, No. 9.

TL: 3.85~6.05 mm, EW: 1.43~2.26 mm. 上翅には銀白光沢のある巻き毛が部分的に密集し、不規則な毛斑を形成。ケナガナガツツキノコムシに似るが、被毛は横臥し小楯板の縦の長さよりもはるかに短い。日本産ツツキノコムシ類の中で最大。少ない。分布: 本州, 四国, 九州, 対馬, 南西諸島; 台湾。寄主菌: エビタケ。

#### 1-3-3. ケナガナガツツキノコムシ *Nipponocis longisetosus* NOBUCHI, 1955 (和名改称)

『原色昆虫大図鑑Ⅱ』p. 216, No. 24, 『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』p. 281, No. 8.

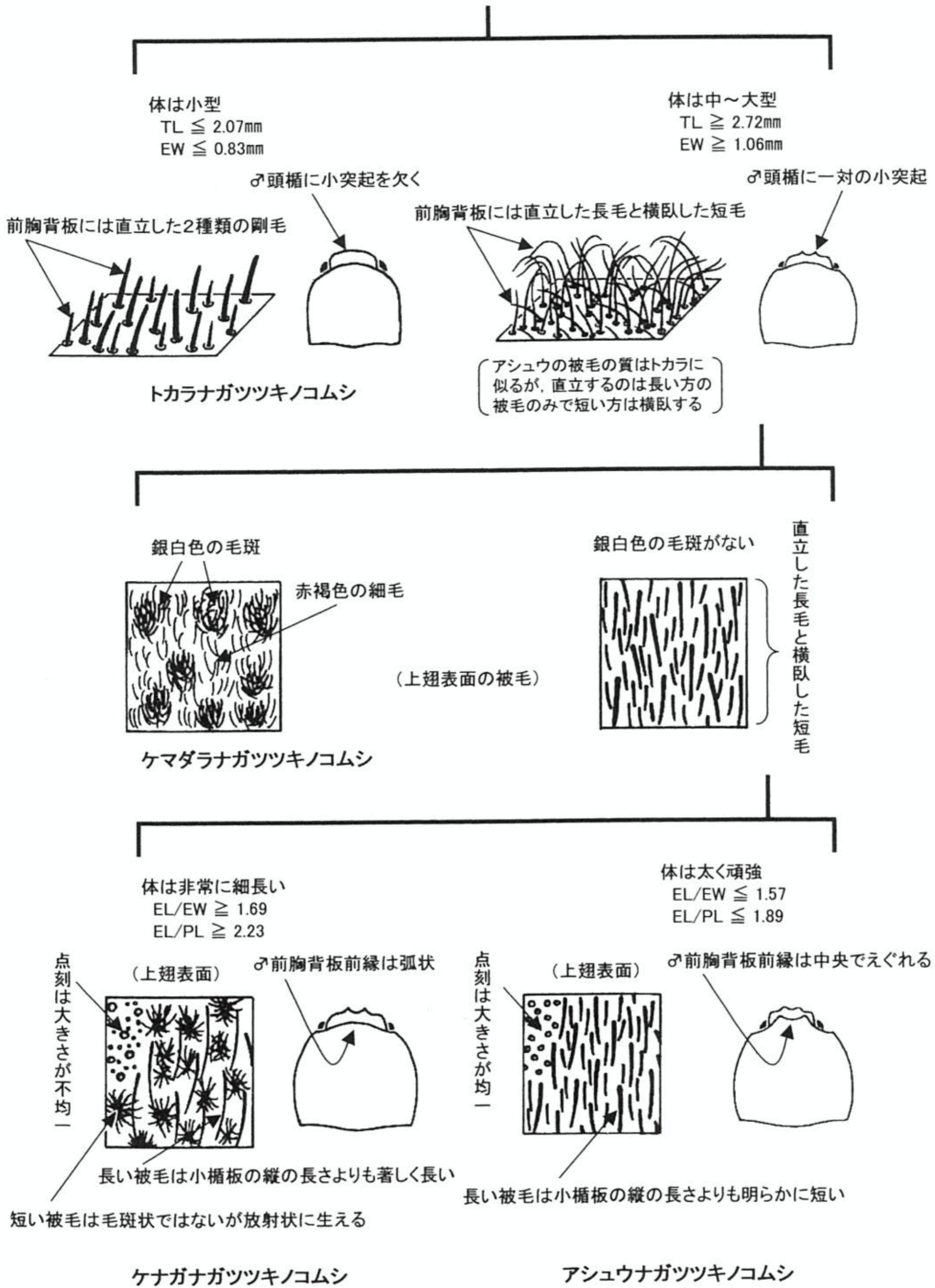
TL: 3.41~5.61 mm, EW: 1.32~2.15 mm. 上翅は直立した長毛と横臥した短毛で被われ、長毛は小楯板の縦の長さよりもはるかに長い。上翅点刻は不均一。前胸背板の巻き毛は部分的に密集して毛斑を形成。♂の頭楯は両側で弱く伸張して葉状片を形成、その内側に一對の微小突起を具える。少ない。分布: 北海道, 本州, 四国, 九州, 南西諸島; 台湾。寄主菌: ハカワラタケ, シハイタケ, ウスバシハイタケ, シロバカワラタケ。ナガツツキノコムシとケナガツツキノコムシの異名があるため、ケナガナガツツキノコムシに改称する。

#### 1-3-4. アシュウナガツツキノコムシ *Nipponocis ashuensis* NOBUCHI, 1959

『原色日本甲虫図鑑Ⅲ』p. 281, No. 7.

TL: 2.72~3.88 mm, EW: 1.36~1.67 mm. 上翅は直立した長毛と横臥した短毛で被われ、長毛は小楯板の縦の長さと同じか短い。上翅の点刻は1種類。♂の頭楯は4歯状、前胸背板前縁は中央でえぐれる。少ない。分布: 本州, 四国。寄主菌: エビタケ。

ナガツキノコムシ属の種への検索



((株)人と自然の環境研究所)

## 日本産コケムシ科の属への絵解き検索

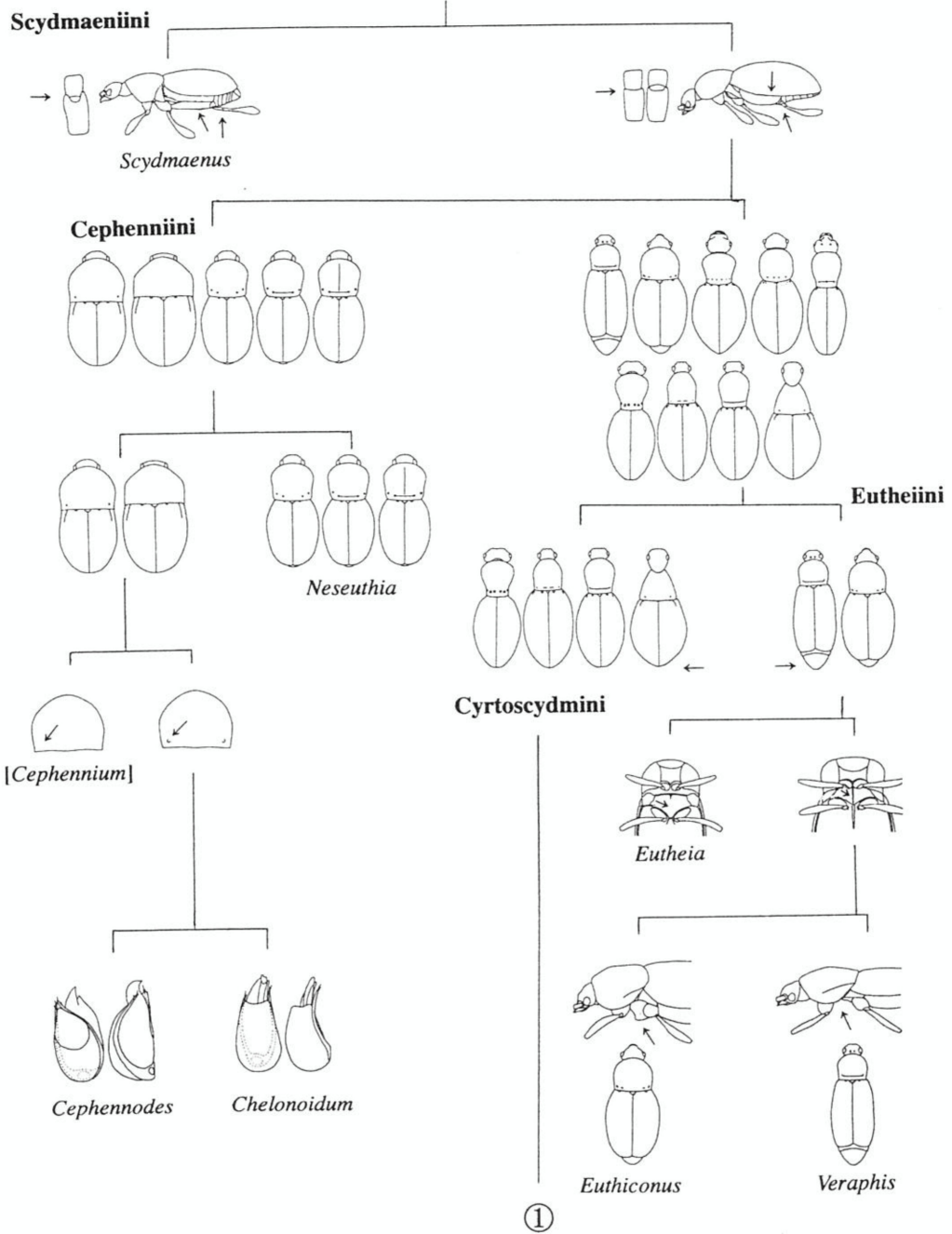
保科 英人・Pawel JALOSZYŃSKI

A Key to Japanese Genera of the Family Scydmaenidae  
(Coleoptera) with Some Notes.

Hideto HOSHINA &amp; Pawel JALOSZYŃSKI

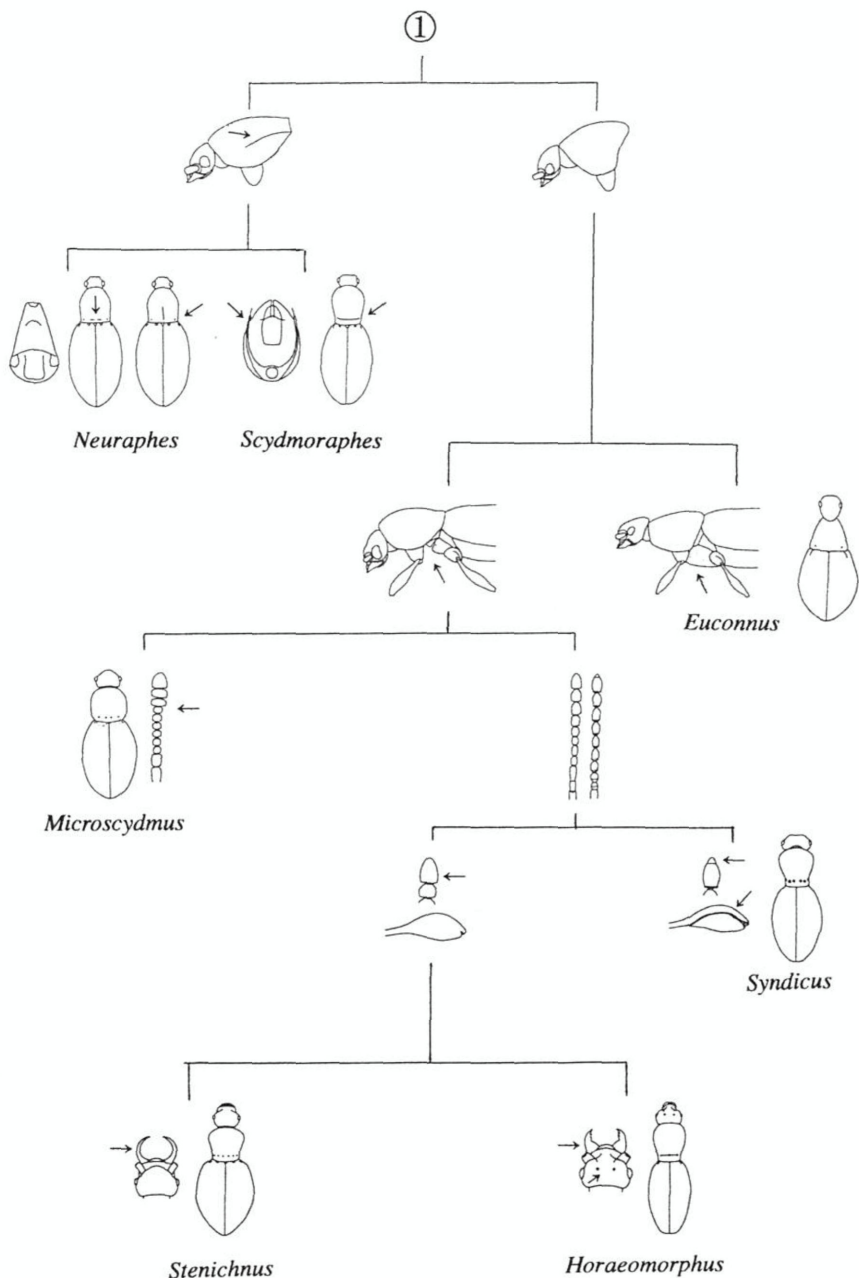
コケムシは、日本産種の全部が3 mmを切る体長を持つグループである。と言っても、その殆どの種は1.5 mm以下の種で構成され、その分類学的研究は極めて遅れている。その理由や背景に関しては、保科(2003a; 2003b)で既に述べた。久松(1985)で日本産コケムシ科の検索表が示されているが、その後追加された属や、また分類学的変遷を経験した属もある。また、標本写真が図示されていない属もあり、日本の甲虫屋には「コケムシは属すらわからん」という思いを抱かされている方も少なくないのではないだろうか。そこで、JALOSZYŃSKI(2002)で示された日本産コケムシ科の属への検索表を第一著者がアレンジしながら日本語に訳し、また両著者が図版を用意し、「ある程度は」初心者の方でもだいたいの属の見当ぐらいはつけられるような絵解き検索表を作製した。なお、第二著者の意向により、以下の検索表には、まだ日本産未記録属で新種記載の準備段階である属や、近隣諸国のコケムシ相から、現在には記録がないが、今後発見される可能性が少なくない属なども含まれていることをご了承願いたい(検索表で[ ]が付いた属は日本未発見の属である)。以下の文章の検索表は、図示した絵解き検索表と対照させながら使用いただければ幸いである。なお、残念ながら、保科(1999)で取り上げた「オス交尾器のみでの属の区別」という問題点は残ったままである。

1. 触角第1節に明瞭な切れ込みがある。後胸前側板は体側面から見て視認できる。後脚転節は細長い。日本産種は尾節板がたいてい露出し、中型～大型種で構成される(*Scydmaeniini*)。...*Scydmaenus* LATREILLE
  - 触角第1節に切れ込みはない。後胸前側板は体側面から見て上翅に覆われ見えない。後脚転節は短いか、ほどほどに長い(但し *Horaeomorphus* 属などオス後脚転節が第二次性徴を示すものは例外)。.....2
2. 体は一般的に幅広く、前胸背板の幅は上翅とほぼ同じか、7~8割以上。頭部はたいてい引き込まれ、頸は背面からは見えない。頭部側縁は複眼の後方で狭くならず、たいてい複眼は前胸背板の前縁に接近する(*Cephenniini*) .....3
  - 体は一般的に細長く、前胸背板の幅は、明らかに上翅より狭い。頭部は引き込まれず、頸は見える。頭部側縁は複眼の後方で狭くなり、複眼は前胸背板の前縁より離れる。 .....6
3. 体はより幅広く、前胸背板は上翅とほぼ同じ幅で、凹陷はないか、2個の凹陷が基部側縁近くにある。触覚は相対的に太い。 .....4
  - 体はやや細く、前胸背板は上翅より少し狭い幅で、たいてい4個の凹陷が基部側縁近くにある。しばしば凹陷を繋ぐ横溝がある。触覚は細長い。 .....*Nes euthia* SCOTT
4. 前胸背板は凹陷を欠く ..... [*Cephennium* THOMSON]
  - 前胸背板は2個の凹陷を基部側縁近くに持つ。 .....5
5. オス交尾器は、水滴状で、先端が尖る中央片と、常に左右対称の側片を持つ。その側片は中央片に巻き付くように位置し、その左右の先端は接近する。 .....*Cephennodes* REITTER
  - オス交尾器は、どっしりとしたふくれた基部をもつ中央片と、左右対称か、やや対称な側片を持つ。その側片の先端はたいてい接近しない。 .....*Chelonoidum* STRAND
6. 尾節板は露出する。頸は頭部に近い幅を持つ(*Eutheini*)。 .....7
  - 尾節板はたいてい上翅に覆われて背面からは見えないが、まれに見えることもある。頸は頭部より明らかに狭い(*Cyrtoscydmini*)。 .....9
7. 中胸腹板は平ら。 .....*Eutheia* STEPHENS
  - 中胸腹板は中央に隆線を持つ。 .....8
8. 体全体の隆起はやや強い。頭頂は凹陷を欠く。中胸腹板の隆線は高い。上翅先端は丸い。 .....*Euthiconus* REITTER
  - 体は概ね平ら。頭頂は凹陷か細溝を持つ。中胸腹板の隆線は低い。上翅先端はやや裁断される。 .....*Veraphis* CASEY
9. 前胸背板は少なくとも基部から1/3あたりまでふちどられた側縁を持つ。 .....10
  - 前胸背板の側縁はふちどられず丸まる。 .....11
10. 前胸背板は中央に縦の隆線か、後縁に沿って、凹陷により中断される横の細溝を持つ。オス交尾器は、側



- 片を持たない。.....*Neuraphes* THOMSON
- 前胸背板は後縁に沿った完全な横の細溝を持ち、その細溝上には凹陷はない。オス交尾器は、側片を持つ。.....*Scydmoraphes* REITTER
11. 中胸腹板は、中央に中脚基節より高い縦の隆線を持つ。触角の球桿部は、先端 3~5 節だが、日本産既知種のほとんどは先端 4 節で構成される。また、希に球桿部は不明瞭になる。.....*Euconnus* THOMSON
- 中胸腹板の隆線はほとんど目立たないか、あっても中脚基節よりは低い。.....12





12. 体は大変小さく、0.9 mm 以下。触角の球桿部は明瞭で、先端 3 節で構成される。 .....  
 .....*Microscydmus* SAULCY & CROISSANDEAU
- 体長は 1 mm 以上。触角の球桿部は不明瞭で、基部の節から先端に向かってだんだん太くなる。 .....13
13. 触角第 11 節は、第 10 節より明らかに小さく、円錐形。腿節後半背面の太くなった部分に明瞭な細溝がある。日本産種は大型種。 .....*Syndicus* MOTSCHULSKY
- 触角第 11 節は通常で、第 10 節より大きいか、ほぼ同じサイズを持つ。日本産種は中～大型種 .....14
14. 上翅基部の凹陷は背面から通常の状態で見える。頭頂には小穴はない。大あごは細い。後胸腹板は

- 短い。日本産種は中型種で構成される。.....*Stenichnus* THOMSON  
 ー。上翅基部の凹陷は、上翅を取り外さないと観察できない。頭頂に 2 つの小穴がある。大あごは太くて丈夫。  
 後胸腹板は長い。日本産種は大型種で構成される。.....*Horaeomorphus* SCHAUFUSS

## 各属の解説

### Scydmaenini 族

#### *Scydmaenus* コケムシ属 (和名新称)

中型～大型種から構成される属で、触角第 1 節の形状で他属との区別は容易である。日本からは 7 種が記録され、うち 1 種 *S. vestitus* (SHARP, 1874) ムクゲコケムシが久松 (1985) で紹介されている。しかし、日本産 7 種は全種のオス交尾器が図示されていないので、現段階での日本産種の確実な同定は全く不可能である。例えば、第一著者の地元・北陸では、石川県の昆虫 (1998) でムクゲコケムシの記録があるが、この記録は信用できない。また、種への同定もさることながら亜属への分類がさっぱりわからないグループである。保科 (2003b) で第一著者が日本産 *Euconnus* ヒメコケムシ属各種の亜属への配置に取り組んでいると紹介した。しかし、コケムシ属の同作業に関してはヒメコケムシ属より困難で「突破口さえ見つからない」というのが現状だ。第二著者が第一著者に語った「コケムシ属の亜属の分類はクレイジーだ」というのは、極めて的を射た発言と言える。その理由はヒメコケムシ属の場合と同様、故 FRANZ が多くの亜属を記載しながら、これまた多くの種を亜属への配置なしに記載した点にある (NEWTON & FRANZ, 1998)。第一著者は欧州産コケムシ属の種を多く観察しておらず、本属の亜属については多くを言及する立場にないが、第二著者の意見として、日本産本属のいくつかは *Scydmaenus* 亜属に分類されるらしい。

コケムシ属は、森林の落葉下や倒木の樹皮下などから採集されるが、一般に本土では希である。逆に、琉球では決して珍しくなく、落ち葉を 30 分程度ふるえば必ずと言って良いほど何匹かは採集される。これら琉球産種は殆どが新種であろうが、前述の理由で亜属への配置がままならず、これ以上の混乱を避けるため、新種とわかっていても、とりあえずは台紙に貼ったまま指をくわえて見ているほかない。

### Cephenniini 族

#### [*Cephennium*] 和名定めず

保科 (1999) で述べたように、本属に分類される日本産種はもちろん、東アジア地域からも記録がない (O'KEEFE & LI, 1998)。日本産 Cephenniini 族の他 3 属とは前胸背板の凹陷の有無で簡単に判別できる。今のところ、日本から確実に本属に含まれる種の存在は知られていないが、欧州や北米に広く分布するグループであり、日本から見つかる可能性はゼロではなく、また過去に記録された経緯もあるので、一応本文に含めておいた。

#### *Cephennodes* ムナビロコケムシ属

今まで、日本本土からは *Cephennodes japonicus* (SHARP, 1886) (= *Cephennium japonicum*) ムナビロコケムシが本属ただ 1 種の日本産種であったが、最近 *C. vafer* KURBATOV, 1995 チシمامナビロコケムシが追加された (JALOSZYŃSKI & HOSHINA, 2003a)。保科 (1999) で述べたように、次属 *Chelonoidum* との区別はかなり困難である。北海道から琉球まで、森林の落葉をふるえばそこそこ採集されるグループである。久松 (1985) で、*Cephennium japonicum* という学名でムナビロコケムシが写真付きで紹介されている。そのためか、各県別昆虫目録、例えば前述の石川県の昆虫 (1998) や福井県昆虫目録第 2 版 (1998) などでムナビロコケムシの名が見える。しかし、これらの同定も全く信用できず、本種の記録として拾う必然性はない。なぜ「拾う」必然性がないかと言うと、国後島から九州まで分布するチシمامナビロコケムシとの区別が難しいほか、久松先生が「ほかに多数の未記載種がいる」と書かれたとおり少なくない新種の存在、次属の日本産種との判別も困難であるからだ。更に付け加えれば、チシمامナビロコケムシとムナビロコケムシは少なくとも九州では確実に混生する。両著者の経験から言えば、ムナビロコケムシの方がチシمامナビロコケムシより先に記載されたにも関わらず、ずっと採りにくいようだ。

#### *Chelonoidum* ニセムナビロコケムシ属

日本から 5 種が記録される。本属の分類学的な点については、保科 (1999) で述べたからここでは繰り返さない。今後新種が多く発見されることは間違いない。採集方法は前属と同じだが、本土ではどちらかと言えばやや標高の高い森林で採れやすいようだ。検索表で示したとおり、前属との区別は今のところオス交尾器の観察に依るほかない。

**Neseuthia** ハラビロコケムシ属

日本からは、JALOSZYŃSKI & HOSHINA (2003b) で記録されたたの属である。4種が日本に生息する。うち3種が八重山と徳之島から採集され、残りが対馬である。本土には生息しない。今後新たな新種が見つかるのであれば、沖縄諸島あたりか、落葉下や倒木などに生息しているようだが、日本産4種は全て珍品と言って良いほど採りにくいグループである。日本産 Cephenniini 族の他2属とは、前胸背板にある小穴の数や、上翅より狭い幅を持つ等で簡単に区別できる。

**Eutheiini 族****Eutheia** 和名定めず

Eutheiini 族の研究に関しては、第二著者の手元に標本が集まるように手を尽くしている。第二著者の見解は、今まで FRANZ (1976) と SAWADA (1962) によって日本から記録された2種は、Eutheiini 族の別属に含まれると言うものである。しかし、第二著者の手元には、北海道産本属の別2新種があり、また既知種の属の移動等をまだ行っていない。よって、とりあえず本稿では、本属を従来通り日本産属の一つとして扱うが、混乱を避けるため和名は定めないことにしておく。本属は *Veraphis* に似るが、検索表に示した形質のほか、頭頂に小穴がないことや、全く異なったオス交尾器を持つ等で区別できる。一般に本属は珍品で、倒木や落葉下から希に採集される。

**Euthiconus** ナガコケムシ属 (和名新称)

日本からは、*E. paradoxus* K. SAWADA, 1962 チビナガコケムシただ1種が知られる。故中根先生のコレクションの中にあるとされる本種のホロタイプは、残念ながら現在行方不明である。落葉下や倒木などから採集されるが、前属と同じく珍品で滅多に採集されない。

**Veraphis** ヒゲトコケムシ属 (和名新称)

日本からは大雪山の *V. ishikawai* HISAMATSU, 1985 ヒゲトコケムシただ1種が知られる。しかし、北海道と本州からいくつかの未記載種も得られている。しかし、本属に含まれるいくつかの種に関しては、分類学的位置が不鮮明なものもあり、今後近隣諸国の本属のファウナは変化する可能性がある。触角第11節が内側に湾曲するという形質は観察しやすいものであるが、ヒゲトコケムシ属の種の全てが共有する形質ではないようである。Eutheiini 族の他の2属との判別は検索表の通り。ヒゲトコケムシ属は主に落葉下から得られるが、珍品のようだ (Eutheiini 族は日本に限らず欧州でもなかなか採れない代物であるらしい)。しかし、昨年第一著者は、石川県白山にて希酢酸を用いたビットホールトラップで100頭を越える大量の本属未記載種の採集に成功した。第二著者に言わせると、これは「ミラクル」らしい。しかもよくわからないのが、採集された個体の90%程度がメスだったことである。

**Cyrtoscydmini 族****Neuraphes** ムナスジコケムシ属 (和名新称)

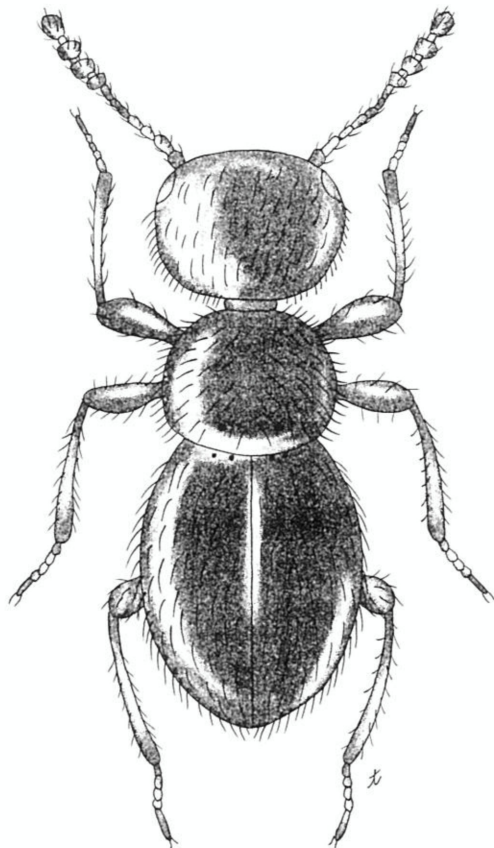
日本からは、北海道の *N. niponensis* FRANZ, 1976 ただ1種が知られる。日本産本種に関しては、前胸背板に縦の隆線があり、日本産他属との判別は容易である。第二著者によると欧州では普通に採れるらしいが、日本では珍品である。第一著者の手元には、堀繁久氏がビットホールトラップで採集された標本がある。

**Scydmorphes** カクムネコケムシ属 (和名新称)

日本からは *S. japonicus* FRANZ, 1976 ただ1種が知られる。第一著者の手元にはいくつかの本属の標本があるが、まだ *S. japonicus* と同一種かどうかは調べていない。しかし、どうやら日本には複数種が生息しているようだ。前属などと同じく大珍品で、滅多に採集されない。ちなみに第一著者は、同属の標本は落葉樹林帯の森林林床の落葉をふるって得た。検索表にあるように、オス交尾器を見れば、ムナスジコケムシ属との区別は容易である。和名は、本属に含まれる種の多くが、側縁がだいたい平行で、背面から見て四角張った前胸背板を持つことから命名した。

**Euconnus** ヒメコケムシ属

日本はもとより世界のどこに行っても、ずばぬけた種数を持つグループである。本属に関しては、保科 (2003b) 等で紹介していく所存なのでここでは深く触れない。今のところ11種が知られる (O'KEEFE & LI, 1998; HOSHINA *et al.*, 2003)。多くの新種を含むが、分類学的問題も多いグループである。特に琉球では採れる種の殆どが新種であるが、亜属等の問題から、記載をじゃんじゃん進めるわけにはいかない、厄介なグループ



Gen. Sp. とにかく変なやつ!

である。

**Microscydus** ツブコケムシ属 (和名新称)

本属についても、保科(2003b)の後書きという形で触れた。現在日本産種は、かつては *Euconnus* (*Microscydus*) *debilis* とされていた *M. debilis* (SHARP, 1874) 1種のみである。保科(2003b)を投稿した後、本種のタイプ及びそのオス交尾器を見ることができた。属和名は、大変小さい体サイズに由来するものである。しかし、前属のヒメコケムシ属の中にも体長が1mmを切るものもあるので、体長はこの両属の絶対的な区別点にはならない。判別点は検索表に示したとおりである。この属もまた大珍品であり、少なくとも第一著者の手元には小野田繁氏より借り受けた標本が1頭あるのみで、自ら採った経験がない。採集方法は落葉をふるえばよいようである。

**Syndicus** モモスジオコケムシ属 (和名新称)

第二著者が記載準備中の段階であるが、その第二著者の強い意向により本稿にて、本属を日本産コケムシの属の一つとして数えることにした。この未記載種 *Syndicus* sp. は八重山から採れたもので、本土からは発見される可能性は低そうである。体は大きくて、触角第11節は第10節に比べて明らかに小さく、腿節背面に細溝があるなど、次属との区別は容易である。本属もめったに採れない代物である。倒木やその樹皮下などに生息しているようだ。

**Stenichnus** マルムネコケムシ属 (和名新称)

日本からは、*S. pollens* (SHARP, 1886) ただ1種が知られる。本属は小さくて丸みをおびた前胸背板や、細長い大あごを持つなどの特徴がある。未記載種も少なくない。欧州にも産するが、第一著者の経験では、日本で

はどちらかといえば、北方よりも、琉球など南方地域の方が採りやすい。採集方法は、他属のように落葉をふるえばよい。

*Horaeomorphus* トゲアシオココケムシ属 (和名新称)

*H. sakishimanus* (和名新称: サキシマトゲアシオココケムシ) が JALOSZYŃSKI (2002) によって、八重山から記録されたばかりである。本種はオス後脚転節が後方に延長し、トゲようになる。このほか、3 mm 近い体サイズや、独特のいかつい体つきから日本産他属と間違えることはない。本属もまた珍品で、倒木などから得られるようだ。

以上、日本産ココケムシ科の全属を長々と解説してきたが、もちろんまだまだ未知の属は存在する。その最たる例が、図に示したココケムシである。これは本会会員の高井泰氏によって奄美大島から1頭のみ採られているものである。とにかく頭でっかちで奇妙キテレツな体型をしている。第一著者は、つくば市の第二著者の自宅にて、これを見せたところ「何やねん、これは、けったいなやっちゃで」という感想を得られた(注: 第一著者による日本語訳)。ヒメココケムシ属に近いグループのようだが、既知属か、新属なのか、またヒメココケムシ属の既知亜属か、新亜属なのか、さっぱりわからない。このように属レベルでも、まだまだ同定できないココケムシはまだ日本には生息しているようだ。

ただし、本文で「本属は珍品」という文章を連発したように、実は落葉をふるって普通に採集される属はかなり限られている。よほど「物好きな」方でないかぎり、本土で一般に採れるココケムシは、ヒメココケムシ属、ムナビロココケムシ属、ニセムナビロココケムシ属の3属にほぼ限定されると言っても過言ではない。

あと、今回定めた属和名についてである。第一著者は、同属に含まれる種は、共通の属和名を語尾に持つべしとの考えを持つ。その考えに従うと、*Microscydmus debilis* コヒメココケムシの和名は変える必要がある。この行為は、今坂(2002)が提唱する「なるべく和名は変えるな」に反するものである。確かにサナエトンボ科に属するからと言って今更コオニヤンマをコオニサナエに変えるのは無理であろう。しかし、保科(2003b)で述べたように、各地で記録されている *M. debilis* は、かなりうさんくさいものが含まれている。このように甲虫図鑑に載っているが故に各地で記録されているが、同定に信用がおけない微小甲虫では、和名を変えた方が、都合がよい場合もあるのではないか。それは、旧和名でのあやしい記録は「リセット」しやすくなるといった利点である。この第一著者の考えに対するご意見・ご批判を待つことにしたい。

末筆ながら、貴重な標本を貸与してくださっている小野田繁氏、高井泰氏、堀繁久氏(五十音順)に厚く御礼申し上げる。

参考文献

- FRANZ, H., 1976. Neue Scydmaeniden aus Japan, sowie Bemerkungen zu bekannten Arten, *Ent. Bl.*, 72: 51-60.  
 福井県自然環境保全調査研究会昆虫部会編, 1998. 福井県昆虫目録第2版. 556 pp. 福井県.  
 久松定成, 1985. コケムシ科. 上野俊一ほか編. 原色日本甲虫図鑑, 2: 239-241.  
 保科英人, 1999. 日本産ココケムシ科 Cephenniini 族の分類学的諸問題. 甲虫ニュース, (126): 5-8.  
 保科英人, 2003a. 東アジア産ハネカクシ上科のマイナー甲虫たち. 昆虫と自然, 38(2): 15-18.  
 保科英人, 2003b. 日本産ココケムシ科ヒメココケムシ属概説(1). 甲虫ニュース, (143): 7-11.  
 HOSHINA, H., S. ARAI, & H. USHIJIMA, 2003. Descriptions of two new species of the genus *Euconnus* (Coleoptera: Scydmaenidae) from Japan. *Ent. Rev., Japan*, 58: 27-33.  
 今坂正一, 2002. 和名と亜種和名についての一提案. 月刊むし, (373): 36-37.  
 石川むしの会・百万石蝶談会編, 1998. 石川県の昆虫. 537 pp. 石川県.  
 JALOSZYŃSKI, P., 2002. First record of the genus *Horaeomorphus* SCHAUFUSS (Coleoptera, Scydmaenidae) from Japan, with description of a new species. *Bull. nat. Sci. Mus., Tokyo, Ser. A (zoology)*, 28: 223-232.  
 JALOSZYŃSKI, P. & H. HOSHINA, 2003a. Notes on the distribution of *Cephennodes vafer* KURBATOV, 1995 (Coleoptera, Scydmaenidae) from the mainland of Japan. *Elytra, Tokyo*, 31: 195-198.  
 JALOSZYŃSKI, P. & H. HOSHINA, 2003b. Four new species of the genus *Neseuthia* SCOTT, 1922 (Coleoptera, Scydmaenidae) from Japan. *Jpn. J. syst. Ent.*, 9: 47-62.  
 NEWTON, A. F. Jr. & H. FRANZ, 1998. World catalog of the genera of Scydmaenidae (Coleoptera). *Kol. Rdsch.*, 68: 137-165.  
 O'KEEFE, S. T. & J. K. LI, 1998. Review of the Scydmaenidae (Coleoptera) of eastern Asia, with particular reference to *Scydmaenus*, and description of the first scydmaenid from Hainan Island, China. *J. N. Y. Ent. Soc.*, 106: 150-162.  
 SAWADA, K., 1962. Sur deux formes nouvelles des Cephenniini du Japon (Coléopt. Scydmaenidae). *Ent. Rev., Japan*, 14: 19-20.

(保科, 福井大学教育地域科学部: JALOSZYŃSKI, ポーランド)

## ○赤城山で採集したナガクチキムシ科甲虫

群馬県富士見村赤城山で採集したナガクチキムシ科甲虫を報告する。

赤城山とは、黒檜山、鈴ヶ岳、荒山などの総称であり、関東平野北西部から立ち上がる山塊である。標高は最高峰の黒檜山が1,828 m、調査地点が1,400~1,500 m、地形は全体になだらかで、広大な森林と開けた高原的な環境を合わせ持つ。調査地点の樹木は、ミズナラ、シラカンバ、ヤシオツツジが多く、ヤマハンノキ、リョウブ、ミヤマイボタ、アカマツなどが混じる。

採集者は全て筆者である。菌類については、今関(1988)を参考にした。

1. アヤモンニセハナノミ *Orchesia elegantula* LEWIS  
2頭, 荒山, 1. VII. 2001.
2. カバイロニセハナノミ *Orchesia ocellaris* LEWIS  
1頭, 八丁峠付近, 14. VII. 2001; 1頭, 荒山, 14. VII. 2001.

本種には、褐色のタイプと黒褐色のタイプとがあるが、当地では同じ時期に両者とも見られる。

3. サビヒロニセハナノミ (仮称) *Orchesia* sp.  
2頭, 八丁峠付近, 16. IX. 2001; 6頭, 同地, 5. VII. 2003.

前種に似るが、小型で体色は淡褐色である。山地性と思われる。

4. カギモンケンナガクチキ *Abdera scriptipennis* LEWIS  
40頭, 八丁峠付近, 18. VI. 2003.

これまでに北海道、長野県、千葉県、山梨県、岐阜県、富山県で採集されている(水野, 1994)。本州では亜高山性と考えられていたが、今回、山地帯上部にも確実に生息していることが判明した。ヤマハンノキ立枯れに生じたダイダイタケ *Inonotus xeranticus* (BERK.) IMAZ. et AOSHI. に似た菌類から採集した。この菌類の寿命が短いためか、成虫は一時的に多数発生し、すぐに姿を消す。

5. オオクロホソナガクチキ *Phloeotriya bellicosa* LEWIS  
3頭, 八丁峠付近, 14. VII. 2001.  
太い広葉樹の立枯れに見られ、1本の木に複数集まることが多い。
6. ミヤケヒメナガクチキ *Symphora miyakei* NOMURA et HAYASHI  
1頭, 八丁峠付近, 1. VII. 2001; 1頭, 荒山, 1. VII. 2001.

細いリョウブの立枯れを叩いて採集した。

7. トゲムネツツナガクチキ *Hypulus acutangulus* LEWIS  
1頭, 八丁峠付近, 1. VII. 2001; 1頭, 荒山, 14. VII. 2001; 2頭, 八丁峠付近, 14. VII. 2001; 1頭,

同地, 5. VII. 2003.

ヤマハンノキ立枯れの樹皮下や枯れ枝から採集した。

8. ボウズナガクチキ *Bonzicus hypocrita* LEWIS  
1頭, 八丁峠付近, 14. VII. 2001; 1頭, 同地, 20. VI. 2003.

シラカンバの倒木や立枯れから採集した。筆者の経験では、これまでにシデ類やサクラ類から採集したが、カンバ類も好むらしく、長野県木曾御岳山では、ダケカンバの立枯れから2頭採集した経験がある。

9. セアカナカグチキ *Ivania coccinea* LEWIS  
1頭, 八丁峠付近, 18. VI. 2003.
10. アカアシナガクチキ *Melandorya mongorica* SOLSKY  
1頭, 八丁峠付近, 18. VI. 2003; 1頭, 同地, 20. VI. 2003.

ヤマハンノキ立枯れから採集した。関東地方での分布は局所的だが、群馬県には多産地が多い。午前中は明るい場所に現れ、午後はやや暗い場所で活動するが、いずれも風通しの良い場所を好むようだ。

11. ルリナガクチキ *Melandorya shimoyamai* HAYASHI  
2頭, 八丁峠付近, 18. VI. 2003; 1頭, 同地, 20. VI. 2003; 1頭, 同地, 5. VII. 2003.

ヤマハンノキ立枯れから採集した。成虫の活動パターンは、前種と同様である。干からびた多孔菌に集まることが多い。

12. ヨツモンナガクチキ *Melandorya flabonotata* (PIC)  
4頭, 八丁峠付近, 18. VI. 2003; 2頭, 同地, 20. VI. 2003; 1頭, 同地, 5. VII. 2003.

細いヤマハンノキ枯死木に見られる。

13. アオバナガクチキ *Melandorya gloriosa* LEWIS  
1頭; 八丁峠付近, 20. VI. 2003.
14. イツモンナガクチキ *Protholpia pictipennis* (LEWIS)  
1頭, 八丁峠付近, 18. VI. 2003; 1頭, 同地, 20. VI. 2003; 1頭, 同地, 5. VII. 2003.

細いヤマハンノキ枯死木に見られる。そだの塊があると多数集まることが多い。

15. ヘリアカナガクチキ *Protholpia ordinaria* (LEWIS)  
1頭, 八丁峠付近, 18. VI. 2003; 1頭, 同地, 5. VII. 2003.

## 参考文献

- 今関六也, 1988. ヒダナシタケ類. 日本のきのこ, 山と溪谷社, 東京.  
水野弘造, 1994. ナガクチキムシ漫談(9). 北九州の昆蟲, 41(1): 33.

(東京都足立区, 木元達之助)

## 奄美・加計呂摩島のコメツキムシ

大平仁夫

Some elaterid-beetles from Kakeroma-jima Island off south of  
Amami-Ōshima Island in the Ryukyu Islands

Hitoo ÔHIRA

加計呂摩島は奄美大島瀬戸内町にあり、大島海峡の対岸に東西に横たわる細長い島である。島の大部分は標高 200~300 m の山林からなっていて、最高峰の弓師岳は標高 314 m である。海岸沿いの各集落を結ぶ道路は比較的良好に整備されているが、山に入る道は集落間を縦断する道が若干あるだけである。ここは過去に伐採などがかなり行われているようで、奄美大島内陸部に比して森林が浅いように思われた。また、複雑に入り組んだ入江は戦時中は陸・海軍の基地や訓練所としても活用されていて、その痕跡が今でも存在する。

筆者は、かねてこの島と奄美大島との分布相の相違を調査したいと考えていたが、2003年7月19日から22日まで滞在し、ナイターも3回行ったが、この間に確認できた種は僅か11種に過ぎなかったし、奄美大島からは記録のある種ばかりであった。しかし、加計呂摩島からのコメツキムシ類の記録は殆どないので、ここに報告することにした。

本文を草するにあたり、この旅行に同行して支援をしていただいた三河昆虫研究会の永井 貞、浅岡孝知の両氏に心から感謝の意を表する。

## 種の目録

1. *Tetrigus okinawensis* ÔHIRA, 1967 ヒメクシヒゲコメツキ

調査標本: 押角林道, 21-VII-03 (1♂). ナイターに飛来した。押角林道は、弓師岳の山頂付近を通して押角集落に抜ける山道で、峠には NTT の送信塔 (標高は 300m ほど) がある。ナイターはこの近くの道路上で行った。

2. *Cryptalaus larvatus pini* (LEWIS, 1894) フタモンウバタマコメツキ

調査標本: 押角林道, 21-VII-2003 (1♂1♀). 西阿室, 22-VII-2003 (1♂). いずれもナイターに飛来した。

3. *Lacon (Alaotypus) yayeyamanus* (MIWA, 1934) ヤエヤマサビコメツキ

調査標本: 押角林道, 21-VII-2003 (1♀). ナイターに飛来した。

4. *Agrypnus (Agrypnus) scutellaris scutellaris* (CANDÈZE, 1893) シロモンサビキコリ

調査標本: 西阿室, 20-VII-2003 (1♂). 海岸近くで行ったナイターに飛来した。

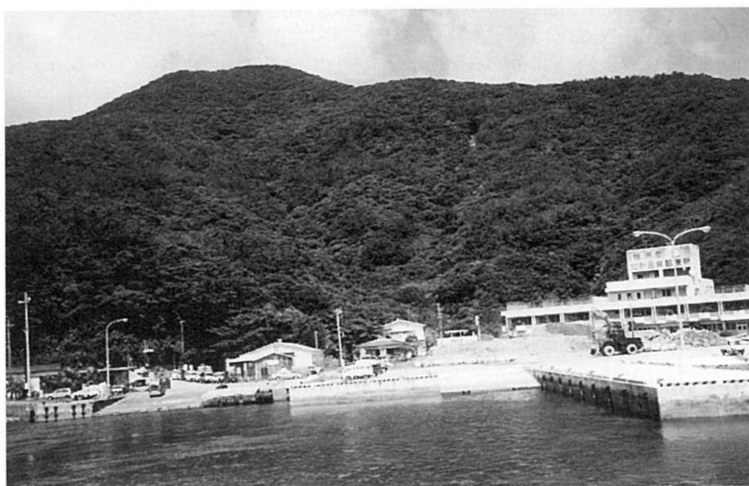
5. *Agrypnus (Colaulon) amamianus* (KISHII, 1974) アマミヒメサビキコリ (Fig. 2A)

Fig. 1. カーフェリー発着港の加計呂摩島・瀬相港。

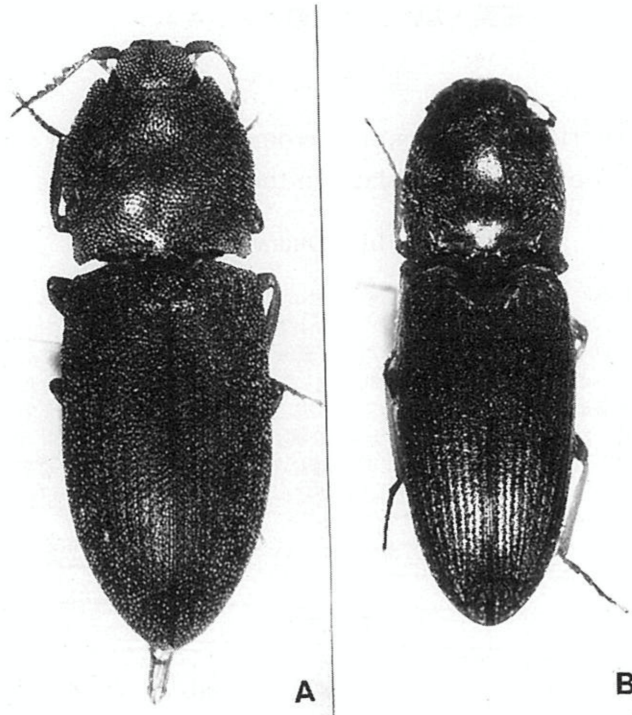


Fig. 2. A. アマミヒメサビキコリ♂, 体長10 mm (西阿室産); B. キカイハナコメツキ♂, 体長7 mm (徳浜産).

調査標本: 西阿室, 20-VII-2003 (1♂1♀); 同上, 22-VII-2003 (2♀). 20日は西阿室の海岸寄りの草地で, 22日は西阿室から瀬相に抜ける山道の谷川沿いでナイターを行った. また, 西阿室海岸近くで糖蜜トラップを設置し, これに本種が入った.

6. *Orthostethus amami* (KISHII, 1987) アマミオオナガコメツキ

調査標本: 押角林道, 21-VII-2003 (2♂1♀); 西阿室, 22-VII-2003 (1♀). いずれもナイターに飛来した.

7. *Melanotus (Melanotus) takahashii* KISHII, 1974 タカハシクシコメツキ

調査標本: 押角林道, 21-VII-2003 (3♂). ナイターに飛来した.

8. *Melanotus (Spheniscosomus) loochooensis loochooensis* MIWA, 1929 リュウキュウクシコメツキ

調査標本: 西阿室, 22-VII-2003 (1♀). 山沿いでのナイターに飛来した.

9. *Melanotus (Spheniscosomus) amamiensis amamiensis* ÔHIRA, 1967 アマミクシコメツキ

調査標本: 押角林道, 21-VII-2003 (1♀). ナイターに飛来した.

10. *Parasilesis okinawensis shirozui* (KISHII, 1959) シロウズクチプトコメツキ

調査標本: 西阿室, 22-VII-2003 (2exs.). 谷川沿いでのナイターに飛来した.

11. *Paracardiophorus tokara kikai* KISHII, 1977 キカイハナコメツキ (Fig. 2B)

調査標本: 西阿室, 21-VII-2003 (3exs.); 徳浜, 21-VII-2003 (19exs.). ここでは各地の海岸の草地の砂浜に広く分布しており, 徳浜では個体数が多かった. 本種は現在いくつかの亜種に分類されているが, 識別が明確でないものがあるので, 将来は再検討が必要と思われる. 奄美大島宇検産は大平 (1997) が報告している.

#### 参考文献

KISHII, T. 1999. A check-list of the family Elateridae from Japan (Coleoptera). *Bull. Heian High School, Kyoto*, (42): 1-144.

大平仁夫 (1995) 奄美大島のコムツキムシ採集記. 北九州の昆虫, 42: 55-58.

大平仁夫 (1997) 日本産コハナコメツキとその近似種について (甲虫目: コムツキムシ科). 比和科学博物館研究報告, (35): 1-16, 14 pls.

大平仁夫 (2000) 栗原桂一・隆両氏採集の奄美大島産コムツキムシ. 北九州の昆虫, 47: 11-12, 1 pl.

(愛知県岡崎市)



## シロオビチビヒラタカミキリのシャクナゲ花柄の粘着質への誘引

岩田 隆太郎

Adults of *Phymatodes albicinctus* BATES (Coleoptera: Cerambycidae)  
attracted to viscous substance on pedicels of alpine rose

Ryûtarô IWATA

カミキリムシ科カミキリムシ亜科日本産種成虫の後食については、ミヤマカミキリ *Massicus raddei* (BLESSIG) がアラカシ (幼虫食樹) の樹液、ムモンベニカミキリ *Amarysius sanguinipennis* (BLESSIG) がカシワ (幼虫食樹) の新葉、ウスイロトラカミキリ *Xylotrechus cuneipennis* (KRAATZ) がブナ (幼虫食樹) の樹液を食することが知られ、それ以外はトラカミキリ族などの訪花性に関連する花粉・葯・花糸などの摂食の記録に限られる (小島・中村, 1986). またこれらの訪花性行動と見えるものの中にも、雨後の濡れた花からの単なる水分補給の行動が含まれている可能性がある. LINSLEY (1961) は、カミキリムシ亜科の多くの種で樹液、一部の種で果実の後食が見られるとし、さらにトラカミキリ族 Clytini の北米産 *Megacyllene snowi* (CASEY) 成虫のアカシア類 (幼虫食樹) の葉の後食を図示しているが、これは本亜科としては例外的な習性と考えられる. 一方本亜科のスギカミキリ族 Callidiini では、訪花性すら知られていず、スギカミキリ *Semanotus japonicus* (LACORDAIRE) では成虫の後食は全く知られず、飼育の際水は必要ながら、それに糖分を加えても成虫寿命増加はごくわずか、またはほとんど見られなかったとされている (小林・山田, 1982; 小林・柴田, 1985).

筆者はこのスギカミキリ族に属するシロオビチビヒラタカミキリ *Phymatodes albicinctus* BATES 成虫が、シャクナゲの花柄の粘着物質に集まり、その部分で摂食とおぼしき行動を見せているのを観察したので報告する.

2003年6月21日、山梨県須玉町金山の観光施設の裏庭に面した軒先にヤマブドウの幹が薪として積まれており、それより無数のシロオビチビヒラタカミキリとアカネカミキリ *P. maaki* (KRAATZ) 成虫が発生していた. これから約30m離れた地点に、庭木としてアズマシャクナゲ *Rhododendron degronianum* CARR. が植え



Fig. 1. シロオビチビヒラタカミキリ成虫が集まっていたアズマシャクナゲの花柄 (山梨県須玉町金山, 21. VI. 2003, 筆者撮影).

られており、花期の前にて、成長点に粘着質をまとった花柄が多数生じていた (Fig. 1.)。この植物に多数のシロオビチビヒラタカミキリが集まって茎や葉を走り回り、花柄に静止しており、一部はその粘着質にトラップされて身動きがとれなくなっていた。離れた地点で本種と同時に多数の個体が見られたアカネカミキリは、ここでは全く見られなかった。また発生材とおぼしき軒下のヤマブドウとこのアズマシャクナゲの間に位置するすべての植物でもカミキリムシは一切見られなかった。

この粘着質は、シャクナゲと同属のサツキ・ツツジ類に見られるように、糖質より成るものと考えられ、シロオビチビヒラタカミキリはこれを栄養摂取していると考えられた。これは恐らくスギカミキリ族における後食行動の初の記録であろう。本族では成虫の訪花性は一切見られないが、糖分の摂取は口器が退化する特殊な類を除き多くの昆虫の成虫に共通であり、本種でも機会が得られればこのような行動が生じても不思議ではない。しかしこれまでこういった観察例は、筆者の知る限り見られず、また同時に同所で発生していたアカネカミキリはこのアズマシャクナゲで全く見られなかったことも注目値する。スギカミキリ族成虫における糖分摂取行動に関しては、さらなる調査研究が必要であろう。

本報告は文部科学省科学研究費基盤研究(C)15580136(代表研究者:安齋寛)によった。アズマシャクナゲの種同定を賜った日本大学生物資源科学部小山鐵夫教授、および観察当日同行頂いた八王子市の高崎鉄也氏に御礼申し上げる次第である。

### 引用文献

- 小林一三・山田栄一, 1982. スギカミキリ, スギ・ヒノキの穿孔性害虫: その生態と防除序説(小林富士雄, 編). 創文, 東京: 11-58.  
 小林一三・柴田叔式, 1985. わかりやすい林業研究解説シリーズ77: スギカミキリの被害と防除法. 林業科学技術振興所, 東京: 2+88 pp.  
 小島圭三・中村慎吾, 1986. 日本産カミキリムシ食樹総目録. 比婆科学教育振興会, 庄原. 8+336 pp.  
 LINSLEY, E. G., 1961. The Cerambycidae of North America. Part I. Introduction. *Univ. Calif. Publ. Entomol.*, 18: 1-135.  
 (日本大学 生物資源科学部)

### ○群馬県におけるネクイハムシ類2種の記録

群馬県におけるネクイハムシ類の分布記録は少ない。筆者は、群馬県内でスゲハムシとイネネクイハムシの分布を確認しているので報告する。

#### 1. スゲハムシ(キヌツヤミズクサハムシ) *Platyeurys sericea* (LINNAEUS)

1 ex., 群馬県長野原町応桑, 20. V. 2002, 筆者採集。

本種の群馬県西部における既知産地としては嬭恋村バラキ湖がある(松原, 1989)。

#### 2. イネネクイハムシ *Donacia provostii* FAIRMAIRE

5 exs., 群馬県吾妻町荻生, 7. VIII. 2002, 筆者採集; 1 ex., 群馬県板倉町海老瀬, 24. VIII. 2003, 筆者採集。

吾妻町荻生では放棄水田跡の湿地でコナギの葉を摂食する成虫を確認した。板倉町海老瀬ではハスの葉上に見られた。板倉町からはこれまでに板倉町行人沼の記録が報告されている(松原, 1988)。

末筆ながら、報告に際し、文献等についてご教示いただいた林成多氏にお礼申し上げます。

### 参考文献

- 松原 豊, 1988. 群馬県館林市周辺ネクイハムシ類調査報告. *Donaciist.* (2): 16-17.  
 松原 豊, 1989. 1988年関東地方で採集したネクイハムシ類. *Donaciist.* (3): 9-10.  
 野尻湖昆虫グループ, 1985. アトラス・日本のネクイハムシ. 野尻湖昆虫グループ, 大阪.  
 須田 亨, 1985. 群馬県の昆虫類. 群馬県動物誌, 305-

385. 群馬。

(埼玉県さいたま市, 岩井大輔)

### ○カクツヤアバタハネカクシの採集記録

カクツヤアバタハネカクシ *Thympanophorus sauteri sauteri* BERNHAUER は体長9mm内外で、頭部背面および前胸背板は密に臍状の点刻でおおわれ、翅鞘の各肩部には金色毛斑を備えるきわめて特徴的な種である。これまで、佐渡島および沖縄を除く関東以西の地域に分布することが知られているが、採集例は多くない。1999年に新井志保は、この種の新たな採集例を記録すると同時に、この時点までに判明した各採集地を総括・報告している(甲虫ニュース, (123): 11-12)。

私は手許に保有しているハネカクシ類を整理している過程で、上記の報告にもれたものおよびこの報告後に寄贈を受けた若干の個体を見いだしたので、ここに記録し、ご恵与頂いた方々のご厚意に報いたい。なお、私自身の1採集例も併せて記録しておく。

1♀, 神奈川県藤野町牧野, 19. VII. 1987, 渡辺泰明採集; 1♀, 奈良県吉野郡弥山, 8. VII. 1989, 山田壮一採集; 1♂, 鹿児島県肝属郡田代町花瀬, 22. VII. 1993, 小野田繁採集; 1♀, 鹿児島県肝属郡高山町国見山, 15. VII. 1993, 小野田繁採集; 1♀, 鹿児島県曾於郡志布志町笠祇山, 25. VII. 1993, 小野田繁採集; 1♂, 鹿児島県熊毛郡屋久町白谷, 3. VII. 1994, 小野田繁採集。

(東京都町田市, 渡辺泰明)

## ヨコミゾドロムシ香川県の記録

藤本博文・上手雄貴

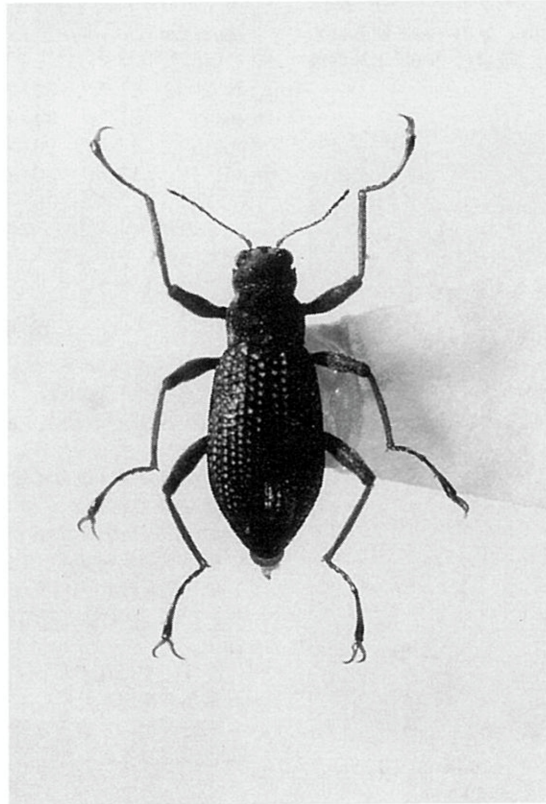
かつてヨコミゾドロムシ *Leptelmis gracilis* SHARP は、水草が多く湧水のある清澄な池にのみ生息する種と考えられており、レッドデータブック（環境庁編，1991）では絶滅危惧種に指定された。その後、淀んだため池（松井，1992）や、河川の中・下流域等、湧水のある池以外にも生息することが明らかになった（福岡県，2002；山地，1989，2002，2003；吉富ほか，1999）。しかし、記録は人間活動の影響を受けやすい平野部に集中しており、水質汚濁や河川改修等による絶滅が危惧される状況に変わりはない。実際、2000年4月よりWebページ上で公開されている昆虫類のレッドリストにおいても、本種は「絶滅の危機に瀕している」とされる、絶滅危惧I類（CR+EN）にリストアップされている。

本種の生息地は本州、四国、九州となっている。中には福岡県のように、最近になって多くの河川で生息が確認された例もあるが（福岡県，2002）、知名度がやや低いこともあってか、全国的には未だ記録が少ないと思われる。四国においても、これまでに生息が確認されているのは愛媛県のみのものである（SATO, 1959）。筆者らは、これまで未記録であった香川県で本種を採集しているので、記録を報告する。

1頭、香川県丸亀市川西町南 [土器川]，12.V.2002，藤本採集・保管（写真）；11頭，同所，28.VII.2002，上手採集・保管。

採集地は中流域の河原だが水量は少なく、ところどころに伏流水が湧き出しており、水たまりや緩流部が形成されている。地下を流れて来たからか水の透明度は高く、本種が採集された地点にはゴマダラチビゲンゴロウが非常に高密度で見られ、他にヒメシマチビゲンゴロウやモンキマメゲンゴロウ、キボシケンゲンゴロウなどの流水性のゲンゴロウも確認された（藤本・上手，2003）。また数km離れた別の地点では、セスジダルマガムシ、コセスジダルマガムシの2種のセスジダルマガムシ属甲虫も採集されている（上手ほか，2003）。

今回記録した個体は全て、緩流部に沈む石を起こし、浮かび上がったゴミを熱帯魚用の目の細かいネット等



ですくい取って採集したものである。

末尾となったが、文献の入手にご協力いただいた河上康子、中島淳、松井英司、丸岡慎、六田宗一郎、山地治の各氏、標本写真の撮影をして頂いた久米加寿徳氏に、心よりお礼申し上げます。

### 参考文献

- 藤本博文・上手雄貴, 2003. 土器川とその流域で採集したゲンゴロウ類. へりぐる, (24): 80-81.  
 福岡県, 2002. 川の生き物ガイドブック一統・生き物からみた福岡県の河川一. 65 pp.  
 上手雄貴・藤本博文・吉富博之, 2003. 四国で採集したセスジダルマガムシ属. 甲虫ニュース, (142): 18.  
 環境庁編, 1991. 日本の絶滅の恐れのある野生生物. レッドデータブック—無脊椎動物編. 272 pp.  
 松井英司, 1992. 熊本県におけるヨコミゾドロムシの記録. 甲虫ニュース, (100): 37-38.  
 SATO, M., 1959. Some aquatic beetles unrecorded from Shikoku, Japan (Coleoptera). *Trans. Shikoku. Ent. Soc.*, 6: 64.  
 山地 治, 1989. 岡山県より採集された甲虫類の記録. すずむし, (123): 14-19.  
 山地 治, 2002. ヨコミゾドロムシ. レッドデータブックとっとり: 129.  
 山地 治, 2003. 岡山県より採集された甲虫類の記録. すずむし, (137): 43-46.  
 吉富博之・白金晶子・疋田直之, 1999. 矢作川水系のヒメドロムシ. 矢作川研究, (3): 95-116.
- (藤本: 博文香川県丸亀市)  
 (上手: 環境科学株式会社)

### ○アマミトラカミキリの寄生蜂

日本産トラカミキリ類の寄生性天敵としてはタケトラカミキリ *Chlorophorus annularis* (FABRICIUS) に寄生するコマユバチ科 Braconidae の *Doryctomorpha chlorophori* WATANABE とエグリトラカミキリ *Chlorophorus japonicus* (CHEVROLAT) にコマユバチ科の *Doryctes nixonii* WATANABE とセダカヤセバチ科 Aulacidae のホシセダカヤセバチ *Pristaulacus intermedius* UCHIDA が知られているにすぎない(安松・渡辺, 1965). 筆者は2003年沖縄島

西銘岳でトキワガキ *Dispyros morrisiana* HANCE (Ebenaceae) の材を採取した。沖縄からこの材をつくば市の(独)森林総合研究所内の25℃の恒温槽に搬入し、4月まで置いた。5月からは室外に出し、大型網室に入れた。その材よりアマミトラカミキリ *Xylotrechus atronotatus angulithorax* GRESSITT が下記のように多数羽化してきた。そして同時にセダカヤセバチ科のリュウキュウセダカヤセバチ *Pristaulacus ryukyuenis* KONISHI も多数羽化した。

羽化月	アマミトラカミキリ	リュウキュウセダカヤセバチ
iv. 2003	21♂♂, 32♀♀	93♂♂, 68♀♀
v.	21♂♂, 34♀♀	13♂♂, 12♀♀
vi.	44♂♂, 90♀♀	10♂♂, 24♀♀
vii.	11♂♂, 36♀♀	13♂♂, 18♀♀
総計	97♂♂, 196♀♀	129♂♂, 122♀♀

この材から羽化してきた昆虫は大半がこの2種であった。そのため、リュウキュウセダカヤセバチはアマミトラカミキリの寄生性天敵だと判断した。

### 参考文献

- 安松京三・渡辺千尚, 1965. 日本産害虫の天敵目録 第2篇 害虫・天敵目録. 116 pp. 九州大学昆虫学教室.  
 (独立行政法人 森林総合研究所, 横原 寛)

### ○カタアカジョウカイモドキの採集例

稀な種であるカタアカジョウカイモドキ *Omineus humeralis* LEWIS の採集例を報告する。

福島県館岩村鱒沢, 14. VI. 1995, 進藤琢也採集; 1頭, 福島県川内村高塚山, 14. VI. 2003, 筆者採集; 1頭, 福島県広野町五社山, 17. VI. 2003, 筆者採集。

高塚山では花上から、五社山では倒木に残った枯れ葉から採集した。

末筆ながら、貴重な標本を恵んでくださった進藤琢也氏に厚くお礼申し上げます。

(東京都足立区, 木元達之助)

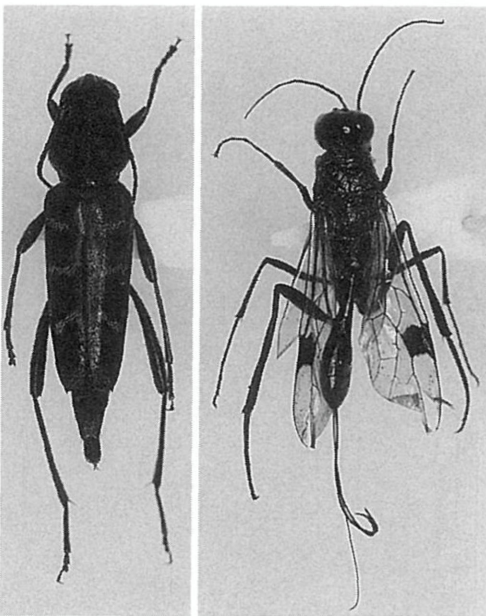
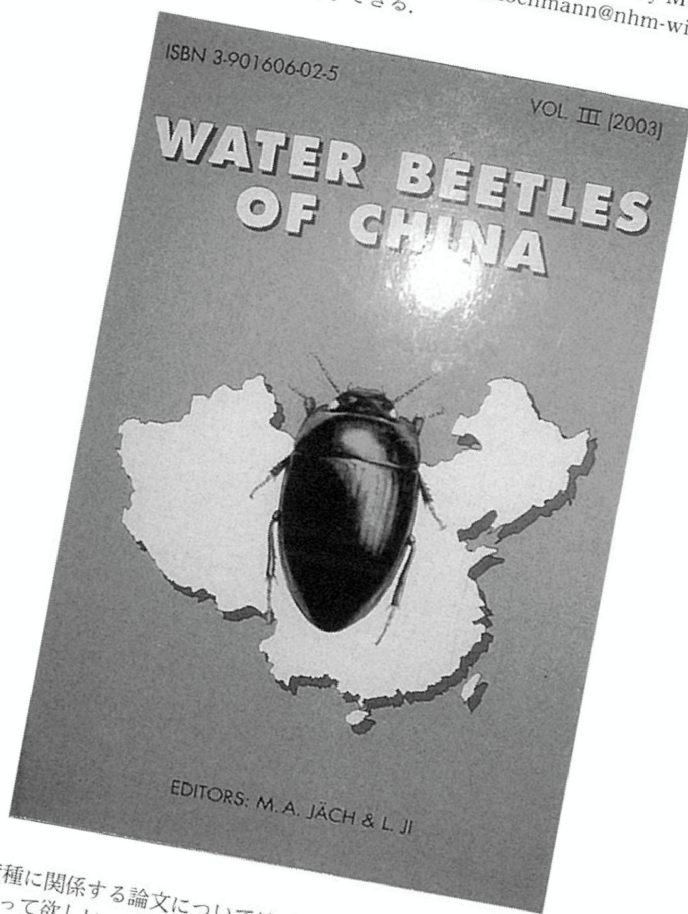


写真 左: アマミトラカミキリ ♀, 14 mm, 右: リュウキュウセダカヤセバチ ♀, 14 mm.

JÄCH, M. A. & L. JI, (eds.) (2003) *Water Beetles of China, Vol. III*. —Wien: Zoologisch—Botanische Gesellschaft in Österreich and Wiener Coleopterologeverein, ii+vi+572 pp.

1999年から2001年に行われた“China Water Beetle Survey (CWBS)”の結果を中心にまとめた、中国の水生甲虫類に関する論文集である。論文数35タイトル、著者31名、扱った分類群3亜目14科と、前2巻(Vol. 1: 1995年, Vol. 2: 1998年)に引き続き、質、内容、量とどれをとってもすばらしい本となっている。中国本土に関する論文がほとんどではあるが、日本を含むアジアの水生甲虫類を研究するうえで、欠くことのできない本となっている。なお、本巻の最初に編者のDr. JÄCHが、今後続刊の予定はなく、CWBSの成果に関する論文はKoleopterologische Rundschauなどに報告されると書いている。

本書の購入は、ウィーン自然史博物館のDr. H. SCHÖNMANN (Natural History Museum, Burgring 7, A-1014, Wien, Austria / Fax: 43 (1) 523 5254 / e-mail: heinrich.schoenmann@nhm-wien.ac.at)へ直接申し込み、送料込みで85ユーロ(約11,000円)で入手できる。



注目すべき内容や日本産種に関する論文については、以下のものがある(カッコ内は我々のコメント)。詳しい内容等は、原本に当たって欲しい。

BALKE, M., *et al.*: Aspidytidae: On the discovery of a new beetle family: detailed morphological analysis, description of a second species, and key to fossil and extant adaphagan family. 53-66. [南アフリカから最近記載された科Aspidytidaeの2番目の種を中国から記載している。多くの図と共に採集地の写真も載っており日本からの発見も期待される。なお、標本写真等はネット上でも公表されている。]

OLEDO, M.: Noteridae: Synopsis of the Noteridae of China, based mainly on material collected during the China water

- beetle survey (1993-2001). 67-88. [中国の Noteridae についての論文であるが、日本産数種についても触れている。日本産種に関する分類学の変更はない。]
- FERY, H.: Dytiscidae: V. Taxonomic and distributional notes on *Hygrotus* STEPHENS, with emphasis on the Chinese fauna and a key to the Palearctic species. 133-193. [*Coelambus* 属を *Hygrotus* 属の亜属として扱い、日本産種についても触れられている。 *H.* (s.str.) *inaequalis hokkaidensis* M. SATO, 1972 と *H.* (*Coelambus*) *impressopunctatus hiurai* (M. SATO) の日本産種がそれぞれ原名産種の新参シノニムとされた。また、日本から知られる *H.* (*Coelambus*) *vittatus* SHARP, 1884 は、やや異なるものとしていたもの従来どおり *H.* (*Coelambus*) *chinensis* (SHARP, 1882) のシノニムとして扱っている。]
- ŠTASTNÝ, J.: Dytiscidae: X. Review of *Platynectes* subgen. *Guoerguivetes* VAZIRANI from Southeast Asia (Coleoptera). 217-259. [*P. chujoi* M. SATO, 1982 の再記載が行われている。]
- NILSSON, A. N.: Dytiscidae: XI. New species, new synonymies, and new records in *Platambus* THOMSON from China (Coleoptera). 261-278. [*Agabus nakanei* NILSSON, 1997 (現在は *Platambus* に入られている) が *Platambus stygius* (REGIMBART, 1899) の新参シノニムとされた。また、*P. optatus* が中国からも記録された。]
- VONDEL, B. J.: Halipidae: I. Three new synonymies. 285-287. [MAKHAN (1999) により記載された3種を新参シノニムとしている。それらは日本からも知られる種である。本科は斑紋や大きさの変異の幅が大きく、多くの標本を見て判断しないと軽々しく新種記載は出来ないと、この筆者は説いている。MAKHAN の分類・記載については、HANSEN (1999) がホソガムシ科についても批判している。]
- JÄCH, M. A., & J. A. DÍAZ.: Hydraenidae: IV. Additional notes on *Hydraena* KUGELANN from the Ryukyu Archipelago (nansei-shoto), Japan. 379-382. [与那国島から *H.* (*Hydraenopsis*) *yonaguniensis* が記載された。また、*H. sauteri* に近似の種も同島から記録しているが、本種の正確な分類については保留している。]
- KOMAREK, A.: Hydrophilidae: I. Check list and key to Palearctic and Oriental genera of aquatic Hydrophilidae (Coleoptera). 383-395. [旧北区および東洋区から知られる水生ガムシ科の属の検索表。暫定的なものながら、たいへん有効なものである。]
- LEE, C.-F., M. A. JÄCH, & M. SATO: Psephenidae: Revision of *Mataeopsephus* WATERHOUSE (Coleoptera). 481-517. [*Mataeopsephus* 属の再検討。西表島から採集されていた大型の同属の標本は、*M. taiwanicus* LEE, YOUNG & BROWN, 1991 と同定され、記録された。対馬から知られ、問題となっていた *M. japonicus sasajii* SATO, 1970 は原名産種の新参シノニムとされた。また、*M. japonicus* と *M. maculatus* の幼虫を含めた再記載が行われている。]
- JENG, M.-L., J. LAI, & P.-S. YANG: Lampyridae: A synopsis of aquatic fireflies with description of a new species (Coleoptera). 539-562. [水生 *Luciola* 属の再検討。日本産3種 (*L. cruciata*, *lateralis*, *owadae*) を再記載している。ゲンジボタルの西日本型と東日本型のことについての検討はされてなく、扱いは保留となっている。]
- YOSHITOMI, H. & B. KLAUSNITZER: Scirtidae: World check list of *Hydrocyphon* REDTENBACHER, and revision of the Chinese species. 519-537. [7 種群 49 種のリストを作成、中国から8新種を記載した。なお、日本の既知種は、3種である。]

(株式会社環境指標生物, 吉富博之; 名古屋市緑区, 佐藤正孝)

### ○アカハネムシ科甲虫に関する情報提供の報告

本紙 No. 139 にてアカハネムシ科甲虫に関する情報提供をお願いしたところ、齋藤昌弘氏、山地治氏よりご連絡いただいたので報告する。貴重な情報をご提供いただいたお二人に厚くお礼申し上げます。

#### 1. ムナビロアカハネムシ *P. laticollis* (LEWIS) と *P. aurita* (LEWIS) について

齋藤氏によれば、*P. aurita* (LEWIS) の扱いは過去に幾度かの変更を経て、現在はムナビロアカハネムシの亜種となっているとのことである。しかし、西日本産個体と東日本産個体との間に大きな差異が認められるため、別種扱いする者もある。齋藤氏も両個体を比較調査されたが、明確な区別はできなかった。

#### 2. アナアカハネムシという種について

黒沢・渡辺(1984)に掲載されたアナアカハネムシとは、齋藤氏によれば、*P. aurita* (LEWIS) の和名であり、*P. aurita* (LEWIS) はムナビロアカハネムシ

とは別の種であると考えられた黒沢良彦博士がこの和名を与えられたらしいとのことである。

#### 3. コブアカハネムシ *P. gibbifrons* (LEWIS) の採集例について

山地氏よりコブアカハネムシらしき標本をお貸しいただいたが、全て早であったため、同定できなかった。近似種オニアカハネムシ *P. japonica* (HEYDEN) は個体差が激しいため、明確な特徴を具える♂による同定が必須であると考えられる。齋藤氏は、過去にコブアカハネムシと同定された標本をいくつか検したが、全てオニアカハネムシであったとのことである。今後ともコブアカハネムシを採集された方には、是非とも発表をお願いしたい。

#### 参考文献

- 黒沢良彦・渡辺泰明, 1984. 野外ハンドブック(12)甲虫: 201. 山と溪谷社, 東京.  
(東京都足立区, 木元達之助)

### ○ムネモンアカネトラカミキリの屋久島における記録

2003年6月30日屋久島安房在住の坂野勇人氏は、安房中学校近くで飛翔してきて萱に止ったムネモンアカネトラカミキリ *Xylotrechus atronotatus* PIC を採集（体長19mm, 保管も同氏）した。図鑑によるとムネモンアカネトラカミキリは3亜種に分かれ、日本には次の2亜種が分布するとされている。即ち、奄美大島、加計呂麻島、徳之島、沖縄本島に分布する *Xylotrechus atronotatus angulithorax* GRESSITT および石垣島、西表島、竹富島、波照間島、小浜島に分布する *Xylotrechus atronotatus generous* MATSUSHITA である。採集した個体は、写

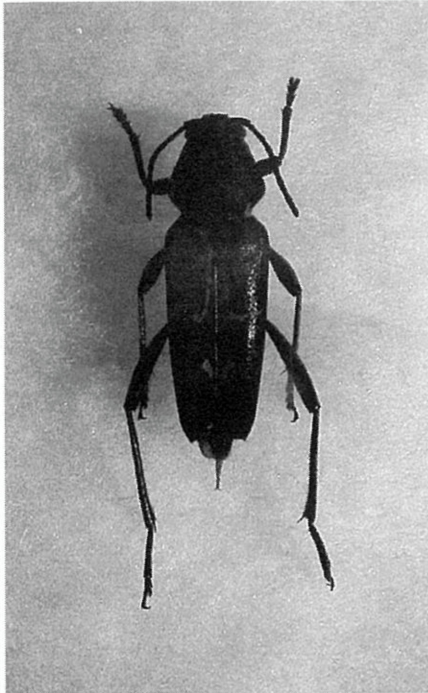


写真1. 採集されたムネモンアカネトラカミキリ

真に示すように、基部後方の斜帯は狭く、中央後方の帯は狭くて不連続であることから前者であると同意定される。採集された個体は、屋久島へ持ち込まれた材から脱出したものか、屋久島に生息するものかは明らかでない。今後注目して追跡したいと考えている。

#### 参考文献

日本鞘翅目学会編, 1995. 日本産カミキリムシ大図鑑. 565 pp. 96 pls. 講談社, 東京.  
(鹿児島県屋久島, 久保田義則)

### ○島嶼におけるカッコウムシの記録

カッコウムシの分布資料として、筆者が所有している標本のうち島嶼産の種を報告する。いずれも各島から未記録と思われる。

#### 【東京都伊豆諸島大島】

ムナグロナガカッコウムシ *Opilo niponicus* LEWIS  
2 exs., 三原山頂口, 23. VII. 2003, 鈴木互採集.  
ツマグロツツカッコウムシ *Tenerus hilleri* HAROLD  
1 ex., 岡田, 22. VII. 2003, 鈴木互採集.

伊豆大島からはカッコウムシの記録そのものが初めてと思われる。2種とも灯火採集で得られた。

#### 【長崎県五島列島中通島】

ダンダラカッコウムシ *Stigmatium pilosellum* (GORHAM)

1 ex., 三王山, 25. VI. 1985, 日下部良康採集.

これまで五島列島では、福江島からツマグロツツカッコウムシの記録がある（今坂ほか, 1994）のみ。ダンダラカッコウムシは五島列島から2種目、中通島からは初のカッコウムシとなる。

#### 【長崎県対馬】

ツマグロツツカッコウムシ *Tenerus hilleri* HAROLD  
1 ex., 竜良山, 25. VII. 1989, 伊藤正雄採集.

対馬からは6種のカッコウムシが記録されている（白水・宮田, 1976; 中村, 1986; 秋田, 1988）が、その中に本種の名前は見当たらない。

末筆ながら、標本を提供して下さった伊藤正雄、日下部良康、鈴木互の3氏にお礼申し上げる。

#### 参考文献

秋田勝己, 1988. 対馬のムナビロカッコウムシ. 月刊むし, (214): 31.  
今坂正一・青木良夫・池崎善博・楠井善久・日下部良康・桃下 大・野田正美・田中 清・長崎北陽台高校生物部, 1994. 五島列島において1982年から1994年に新たに採集と報告された甲虫(1). 長崎県生物学会誌, (44): 50-76.  
中村俊彦, 1986. カッコウムシの新分布地. 月刊むし, (188): 40.  
白水 隆・宮田 彬, 1976. 対馬産昆虫類目録, 長崎県生物学会編, 対馬の生物: 567-763.  
(東京都大田区, 酒井 香)

#### ◇甲虫ニュースの原稿送付・問い合わせ先◇

原稿をワープロ等で作成される場合は、刷り上がり2頁を越える報文は1行49字、短報は1行23字にそろえ、FDとプリントアウトした原稿を1部つけて下記宛へお送りください。附図がない場合には電子メールの添付ファイル（一太郎かワード）でお送りください。

〒156-0053 東京都世田谷区桜 3-14-13

鈴木 互

E-mail: elater@b08.itscom.net

## ○オオズミズギワゴミムシ礼文島の記録

オオズミズギワゴミムシ *Bembidion quad-ririmpresum* (MOTSCHULSKY) は日本 (北海道・本州), サハリン, カムチャツカに分布する海浜性のミズギワゴミムシ類で, 日本の離島では佐渡・粟島・渡島大島及びユリ島から知られている。北海道最北の属島である礼文島からは55種の歩行虫が記録されているが (このほか種名の不明確なものが数種記録されている), 本種の記録は無いことから, 普通種ではあるが報告しておく。

3 exs., 礼文町大備大備川河口付近, 18.IX.2003, 松本美奈子氏採集・松本英明氏 (旭川市) 保管。

採集地は, 礼文島北部の久種湖から船泊湾に注ぐ小河川の河口付近で, 砂地が広がる海浜 (オサナイ砂丘) である。

礼文島は, 5種の歩行虫の固有種・亜種を産する利尻島の20 km 北に位置する面積82 km<sup>2</sup>の比較的規模の大きな離島である。標高は低いが強い北西卓越風により高山的な環境が広がっており, 地形・地質が利尻島とは異なることから, 礼文特有の固有種や日本未記録種の発見が期待される島である。しかしながら, 何人かの歩行虫の専門家が入島しているにもかかわらず, 歩行虫 (おそらくは甲虫類全体でも) の固有種としてはチシマオササシの利尻島との共通亜種リシリオササシ1種が知られているのみで, 礼文島にのみ固有である種は1種も見つかっておらず, 現時点では固有性の低い地域と評価せざるを得ない。

筆者は, 礼文島固有の歩行虫の発見等を目的として, 2003年9月18~20日の3日間, 礼文島 (久種湖周辺・礼文岳・緑ヶ丘・礼文林道等) で採集を行ったが, オオズミズギワゴミムシを含むわずか21種の歩行虫しか確認できず, また固有種も確認できなかった。ただし, これは歩行虫の採集には時期が遅かったこと, 自然度の高い国立公園特別保護地区での採集は行わなかったことによるもので, 未知の固有種が生息する可能性が低くなったわけではない。とくに, 礼文岳山頂付近のハイマツ群落, ウェンナイ川周辺の森林や風衝礫地, 桃岩歩道・礼文林道・西海岸の風衝草原等のような良好な生息環境の残存する地域 (これらはほとんどが特別保護地区に指定されている) を精査すれば, 例えば *Trechus* 属等の種分化しやすい種が確認される可能性は高いと考えられ\*, 今後の同島での総合的な自然環境調査や歩行虫の専門家による適期での本格的な調査が期待される。また, 同島は「花の島」として夏季を中心とした数ヶ月に観光客の入り込み数の集中増加が見られ, 道路等の開発が進んでいることから, 徐々に生物の生息条件は悪化してきており, 早急な調査が望まれる。

最後に, 同島を同行案内して下さったレブンクル

\* 利尻島に比して面積規模が半分以下であること, 利尻の固有種がおおむね高標高地で確認されているが礼文では高標高地を欠くこと (最高標高490 m), 過去の森林伐採等による人為攪乱影響が大きいこと, 等から固有種が生息していない, あるいは絶滅している可能性も皆無ではない。

自然館の宮本誠一郎氏, 事前情報を教示下さった利尻町立博物館の佐藤雅彦氏, 入林許可でお世話になった宗谷森林管理署礼文森林事務所の水野谷聡森林官, 調査に同行して下さった松本美奈子氏, 文献等で協力下さった松本英明氏, 北海道北部のオササシ類の知見を教示下さった井村有希氏に深くお礼申し上げます。

## 参考文献

- 堀 繁久, 2001. 北海道周辺離島のオササシ科甲虫相. 昆虫と自然, 36(3): 4-8.  
保田信紀・松本英明, 2000. 北海道産歩行虫類の支庁・島嶼別分布表 (2000年). 層雲峡博物館研究報告, (20): 35-47.  
MORITA, S., 2000. *Pterostichus (Phonias) diligens* (STRUM) (Coleoptera, Carabidae) found in Japan. *Elytra*, 28: 39-43.  
北海道開発局稚内土木現業所, 1998. 道々礼文島線土泊地区道路事業 (動植物調査結果).  
小崎尚ほか (編), 2003. 日本の地形2 北海道. 東京大学出版会. 384 pp.  
大場達之, 1988. 利尻・礼文の植生. 日本の生物, 2(6): 28-40.

(神奈川県横浜市, 松本俊信)

◇日本鞘翅学会ホームページ  
“ELYTRA”のご案内◇

日本鞘翅学会の沿革や活動内容を紹介しております。学会の詳しい投稿規定, 出版物や催しのご案内もしています。一度ご覧下さい。

<http://www.soc.nii.ac.jp/jsc2/index.html>

## 甲虫ニュース 第144号

- 発行日 2003年12月20日  
次号は2004年3月下旬発行予定  
発行者 高桑正敏  
編集者 鈴木 互 (編集長), 長谷川道明, 川島逸郎, 奥島雄一, 吉富博之  
発行所 日本鞘翅学会 〒169-0073東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館動物研究部昆虫第2研究室 ☎ 03-3364-2311  
印刷所 (株)国際文献印刷社  
年会費 6,000円 (一般会員)  
郵便振替口座番号 00180-3-401793

## 昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0.1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

FAX (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社